

川柳の雑記

麻生路郎☆主宰

昭和廿三年七月十一日第三種郵便物認可
昭和廿五年三月九日発行
（毎月一回日発行）
創刊大正十三年・通巻三百九十四号



三月號

No. 394 Pensoj flugas trans la land-limon
THE SENRYU ZASSHI

4月本社句会

腹案
待ちほけ
用心
天国

兼題

武部香林・若菜夫妻歡送の夕べ

本社三月句会

失明の柳人、淀川支部育ての親、武部香林・若菜夫妻が
帰郷されます。盛大に一人でも多くお二人を御送りいた
しましょう。

日時 三月八日(火)午後六時
場所 文樂座別館

市電道頓堀電停南へ二〇米西側
市電日本橋二丁目電停北へ百米西側
(入口は右側から階段を上ってください)

兼題 「黒」 (三句) 麻生路郎選

路郎選の入選発表は四月句会の会場で行います。
(切後の投句は無効となります。句連の裏へ署名記入)

「同情」 (三句) 戸田古方選
「浮名」 (三句) 松江梅里選
「雑魚」 (三句) 富岡淡舟選

席題 三題(当日発表)

二月句会の「時世」発表

挨拶 武部香林
川村好郎

呈賞 ☆各題天位 ☆路郎選天位に不朽洞賞

会費 百円

幹事 紫香・淡舟・いさむ・舟遊・潮花・文秋・唐佑・

狂二・与呂志・白水・水堂・月都・薫風子・水断・
十四郎・一三夫

★投句だけの方は郵券三十円

同封(〆切三月六日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

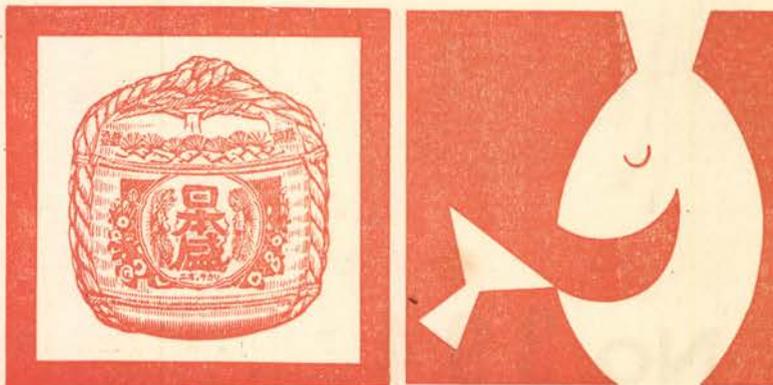
川柳雜誌社句会部

電・住吉 六〇八一

日本盛酒坊

和やかに まず一杯

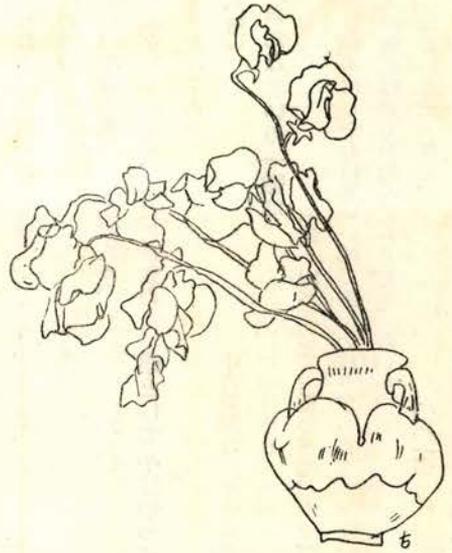
東京酒坊・八重洲口名店街
大阪酒坊・御堂筋道頓堀橋南詰



灘の清酒
二ホンサカリ

不朽洞句帖

麻生路郎



美智子君ご安産を祝して

男子だが軍人などにならしやるな
相ついであやかり組も呱呱の声

ハワイ島のカボホの町へ徐々に近づく熔岩の流れが、町を全滅させるおそれがあるとの報道に、戦りつを感じて、
こころまで流すまいぞよカボホ町

安採条約改正の批准が寸前に迫る

やがて徴兵母のなげきが近づくか
わかつてはいても策なき世なりけり
社会党 忠治も次郎長も居す

川柳雑誌 三月号 目次

不朽洞句帖	麻生路郎	(3)
人間四題	東野大八	(18)
私はおもう	直原七面山	(29)
川名句と難句	麻生路郎	(4)
変りだねの同期生	塩浜一路	(20)
前田雀郎先生を憶う	阿部佐保蘭	(28)
句評リレー	宵明・半休・晃 七面山・むじな	(12)
川柳夫婦善哉	吾水・初胡	(26)
雑稿	丸尾潮花	(26)
絵と川柳で表現する歴史	今西生薑	(27)
ハッパ	戸田古方	(32)
伍健の事ども	酒井ひか平	(22)
川雑女流作家の集い	麻生路郎	(38)
信	梨花・奈良子	(33)
柳頂上会談	清水白柳	(16)
川雑川柳まつり予告	須崎豆秋	(46)
★		
川柳塔	麻生路郎	(6)
同舟近詠	諸家	(11)
近作柳樽	麻生路郎	(20)
金泥集	北川春巢	(35)
各地柳壇	麻生路郎	(20)
入門講座(研究題・プラン)	清水白柳	(30)
柳界展望	清	(39)
一路集「ムダ使い」	戸田古方	(36)
「火事」	杉谷湖山	(37)
ペンの散歩	木村水堂	(46)

題字……麻生路郎・表紙……戸田古方



柳川 名句と難句

麻生路郎

定されている。長歌・短歌・旋頭歌（せんどうか）などが四千五百余首収められていて、七七〇年頃に成立したものである。作者は皇室・貴族を主とするが、東歌（あずまうた）や、防人歌（さきもりうた）のよ

うな民衆の抒情歌や民謡をも含んでいて、健康素朴な生命感の溢れた所謂万葉調の歌集なのである。

万葉集の代表歌人としては天智天皇・額田王（ぬかだのおうぎみ）・柿本人麿・山上憶良・大伴旅人・山部赤人・大伴家持等

である。

いつからか子供は親のものでなし

沈黙の食卓が幾日も続くのも子どものい

ないせいだと悟ると、子どももない淋び

しきは何物にもかえがたいものだ。曾ては

二人の愛の結晶だった子どもたちも、それ

それに菓立って今では私たちのものでない

という親ごころの淋びしさがにじみ出てい

る。

雑魚であれ私ひとりの夫なり

会社では存在すらハッキリしない、あんな男に、よくもまあ、「あなた、あなた、あなた、あなた」

生みの親ふたたび霧の中へ消え

こんな句に接すると、私の眼にはすぐ、

釜ヶ崎のようなスラム街が浮んで来る。これこそ人生の哀詩だと云えよう。

生みの親が、生みの親として名乗らず、

子どもの幸福を祈りながら、ふたたび霧の中に消え去ったのである。

貝柱好きだと老いの一徹な

貝柱は、しがめばしがむほどいい味であるが、老人の歯には逆もかたくてムリだから、およしなさいと云っても、

「なァに大丈夫だ」

の老人の一徹さに何んとなくユーモアが感ぜられる句だ。

貝柱というのは二枚貝の殻の内面上下に附着する筋肉であって、いたや貝、いたら

貝、帆立貝、たいらぎ等は大形で煮干にして食用に供する。

頑として牛はゆっくり用を足し

牛の鈍重な性格をこれぐらい巧みに描写した句は稀れであろう。大自然をバックにして、道バタで、シャアシャアと音たてて

いぼりするさまがホーンツとして映るではないか。

万葉集解るんかいと見くびられ

全部で二十巻ある。有名な割に、読破している人は少ないので簡単に述べておこう。

力強い歌が多いから寸暇を割かれない。撰者は大伴家持（おとおものやかもち）等と推

「オイ、どうかしてヤアしないか」

「何が」

「何がって、君が万葉集なんか抱えこんでさ」

「オレだって万葉集ぐらい読めらァ」

「読めたって、判りゃあしないんだろ」

「彼の女に、オレはインテリだというところを見せたいんだらう」

「バカにするな、オレだって」

「君なら、まァ、森の石松でも唸なっている方が柄にあうよ」という情景が目につ

かぶ句である。

〔六八〕

〔六九〕

〔七〇〕

〔七一〕

〔七二〕

〔七三〕

〔七四〕

〔七五〕

（多久志）

（七面山）

（湖山）

〔六七〕

（三歩）

やるの。だって、会社では雑魚扱いにされて
いるかも知れないが、ワタシにとつては
たったひとりのハズなのよ」と云い切る奥
さんを詠んだもの。これを聞いたら宿六た
るもの、うれし涙がポタリと膝頭を濡らす
に違いない。

〔七〇〕

父母の見栄とつても遠い幼稚園

(喜 由)

父母の見栄は幼稚園から始まる。何んとか
文化学院の附属幼稚園は園長さんが、ア
メリカの何んとか出身だというのは第一の
見栄。道が随分遠いでしょう。だから送り
迎えを女中にさせていますというのが第二
の見栄。こんな調子で、こどものアタマと
は相談なしに中学も高校も越境入学は必至
であろう。おそるべきは斯うしたこどもの
両親の見栄である。

〔七一〕

ムンムンと男の臭う守衛室

(好 祐)

女気の微塵もない守衛室。人生の半ばを
世の荒波に採まれぬいたことをかこつても
なく、平然と古びた椅子によりかかっている
のが彼等守衛たちだ。しかし、まだまだ
色気ぬきに徹底しきらない体軀の持主であ
ることはムンムンと臭う体臭が、それを証
拠立てているというのである。

〔七二〕

串カツの立食い生徒に知れわたり

(堰 子)

この句を読んで、アタマに浮んだのは漱
石の「坊っちゃん」だった。坊っちゃんが
町を散歩して、蕎麦屋で天麩羅を食ったと
ころが、翌日教場へ這入ると、黒板一杯位
な大きな字で天麩羅先生とかいてある。お
れの顔を見てみんなわあど笑った。おれは
バカバカしいから天麩羅を食っちゃ可笑し
いかと聞いた。すると生徒の一人が、然し
四杯は過ぎるぞな。もし、と云った。四杯
食おうがおれの銭でおれが食うのに文句が
あるもんかと、さっさと講義を済まして控
所へ帰って来たというくだりを面白く書い
ている。

〔七三〕

くたびれた顔ともいわず美粧院

(宏 方)

「このマダム、何んというくたびれた顔
をしていらっしやること」
と心のうちでは思っても、そうとはあか
らさまには云えない。

〔七四〕

ボンボンが博士をもろた頼りなさ

(可 住)

親の力で、参議院議員になった御曹子も
あるが、この句は親の力でボンボンが博士
になったのであろう。

〔七五〕

ハズ帰るあわれ変形した靴で

(一 瓢)

「ハズ帰る」は菊池寛の
「父帰る」のような「ハズ
帰る」ではなく、夕刻に動
務先からボンボンと帰って
来たときのハズの疲れた姿
を見ての感想だと思ふ。

で、仕事にとりかかると、黒板一杯位
な大きな字で天麩羅先生とかいてある。お
れの顔を見てみんなわあど笑った。おれは
バカバカしいから天麩羅を食っちゃ可笑し
いかと聞いた。すると生徒の一人が、然し
四杯は過ぎるぞな。もし、と云った。四杯
食おうがおれの銭でおれが食うのに文句が
あるもんかと、さっさと講義を済まして控
所へ帰って来たというくだりを面白く書い
ている。

〔七六〕

悲しくも会社の暇が分つて来

(圭 木)

会社あつての自分だなどは夢にも思わ
なかつた。待遇についての不満はストの先
陣に立って重役陣をゆさぶった。それが若
さの産物であることが近ごろになって漸く
わかつて来た。

斜陽産業である自分等の会社が、多数の
従業員を抱えて、あえいでいるさまが、自
分等の眼にもハッキリ映つて来た。それは
あまりにも悲しい現実だった。それは若
さだけでは救えないことを知ったからであ
る。

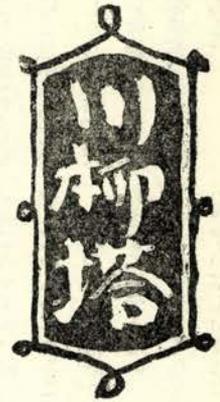
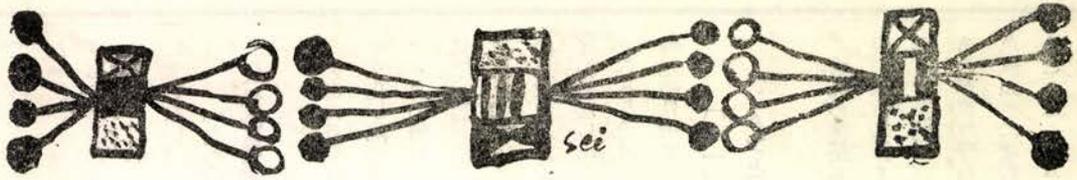


結婚式場

長生殿

神殿(2)控室(16)宴会場
(和洋9)御待合室・更衣
室・美容室・写真室の
ほか、貸衣裳一切を完備
しております ●6階

金曜 定休
松坂屋
大阪日本橋三



紺紬ここの座敷の雨の音

大阪市 丸尾 潮花

雨に出る楳は恋を抱いたまま

振袖がまだまだ似合う若さにて

灯がついているに音さえせぬ新地

大阪市 西 いわを

暇人だ等と云われてクイズ練る

大阪市 武部 香林

豊作のここには食えぬ人の群

モーターに例えてわれを叱咤する

ホノルル 白砂 旋風

ニッドレスああのこうのと家を空け

大阪市 須崎 豆秋

抽斗を整理しながら除夜をさき

お正月らしくヤシにだまされて

元日から一〇番をわずらわし

ホノルル 羽佐間 柳葉

政敵は死んだ後から褒めちぎり

医学の限界ですとは若い医者

宿酔妻の権利が強くなる

奈良県 尾崎 方正

帰宅までにさめるよう呑む恐妻家

堺市 吉田 圭井堂

仏壇にお布施預けて妻出掛け

すれかたが天候だけでない日本

中庸に行く父親で歯痒ゆがり

妾宅へ来れば箒も雑巾も

防府市 長野 井蛙

ふところ手税金ぬきのピンをはね

数の子は今年も値段聞いただけ

鉢巻で斗い取ってみな弾き

大阪市 太田 良子

不良マダムなどと自分で云うてのみ

ベレー帽で医者と見えぬをうれしがり

岡山県 直原 七面山

忘年会で課長煙のように消え

レコードに親しみ針は持たぬ嫁

誰れはばかり酒を飲んでる三十路の娘

口紅の色まで課長指図をし

お互に昔を責めている不幸

鳥取市 河村 日満

ふるさとはよきかな雪のお元日

K氏の渡米に

餞別にシカゴの寒さつけ加え

豊中市 足立 春雄

デパートとバーから年がくれ初め

のみつぶれ何がホーリーナイトやら

大阪市 安岡 珊瑚枝郎

一応は辞退はするが請ける組

倉敷市 木村 千容

豊中市 戸田 古方

スリの慾とかわらぬ慾をもちながら
セクシーを撫でたり分析してみたり
まっ白い恐怖ともなるスイッチよ

八尾市 西尾 栞

交又点アレアレ次男もう渡り
ルンペンも青で渡った交又点
空咳をまじえて話す十二月
尼さんのもつたいなくも良いえくぼ

大阪市 市場 没食子

顔見世とスト恒例の十二月
値下りの株抱いたまま年を越し

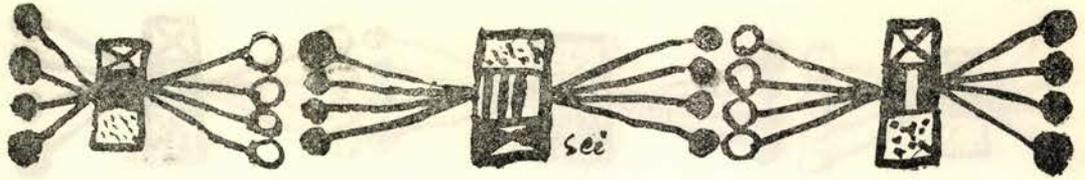
西宮市 若本 多久志

運転手アベックなので安心し
別れちゃったわとバーの赤い爪
三面鏡鼻もそんなに低からず

大阪市 正本 水客

したいことさして五人の父であり

近江八幡に川上日車翁旧居を訪ねて



金婚を目途に暮した二三年
有り難や金婚祝は自前です

七十すぎいとしきものに茶吞妻

倉敷市 田垣 方大

新米はバックミラーのほしい席

ワイフもう茶の客酒の客をわけ

邪魔ものにされた現場の背広服

加賀市 野村 味平

再婚の日からがくと老いを知り

デザインはこうも女を見違える

大阪市 木村 水堂

税金で賄う予算気前よく

更年期夫の権利まで侵し

悠々と酔うて正月らしくなり

高槻市 福田 丁路

恋愛を遊戯と云えり悲しくも

奥さんのお伴でダンスハイボール

大阪市 真鍋 一瓢

酌ぐ時の貞女の顔をやめてほし

愛されているのよ自由などはなく

芋の皮でもむくよに暮の散髪屋

芸なしを酔わせば又もノーエ節

大阪市 後藤 梅志

元朝のマッチを捨てるとこもなし

お賽銭を出す役にして連れ出され

肩ぐるまやっぱり親子よく似てる
温床に育った政治家ばかりでは

米子市 小西 雄々

凡人になれず今年も泣上戸

親の恩よりも晴着に礼を言い

大阪市 山川 阿茶

行く末を思やアプレになりたい気

大阪市 金井 文秋

東芝だマツダだ初荷派手な列

年頃へ婦人誌さえも気を使い

加賀市 那谷 光郎

置くところに置けとつまずいたで叱り

贈り膳銚子一本義理に乗り

大阪市 北川 春葉

初出勤駅まで走り初めもする

正月のつづきで酒量ふえたまま

手を引いて負うて福買う宵戎

岡山市 浜田 久米雄

表面は笑い内心爪を研ぎ

盆栽の芽を女房に見つけられ

岡山市 逸見 灯竿

御利益は一ばい飲める初詣

芸術の行く手の壁の厚さ知る

出雲市 尼 緑之助

いざ白髪や染めん初あかり

動物の恋を描いて金にする

大阪市 水谷 竹莊

叱られた孫なぐさめて叱られる

逢い引も春の約束して別れ

酔いどれもはこぶ師走のバトロール

鳥取市 杉谷 湖山

暖房がきいて社長は社を歩るき

事故あった標識にバス目もくれず

京都市 大鶴 喜由

父親とどっこいそっこいの人に惚れ

好き好きと努力をすれど十ちがい

子の愛と夫の愛にせかれつつ

尼崎市 小林 文月

大学で暴れることを先ずおほえ

東京都 山根 白星

政治力とかは田圃に駅をたて

家柄を買い人形を抱く如し

級長に酒に目のない父が居り

姉の好く人を嫌っている弟

村役場助役生きてることは生き

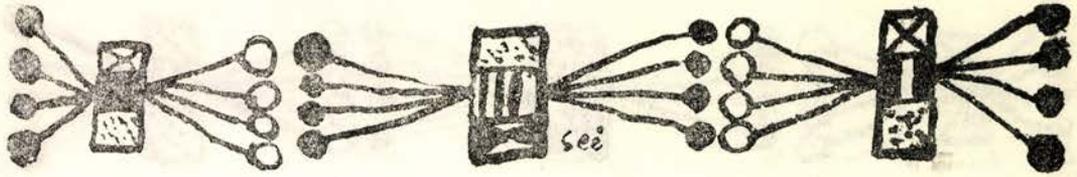
呉市 林野 甞光

ただ一目逢う靴下の真赤なり

斬られ方の苦心を楽屋ほめて呉れ

岡山県 福島 鉄児

株価暴落友が心配した電話



三人の子供の父が皆違い

岡山市 服部十九平

妻君の靴も磨いて共稼ぎ

肩車した子の靴を妻がさげ

台所男ガチャガチャ音をたて

岡山市 大森娘句楽

五州閣三百疊の喉がかれ

五州閣雨が名残りを惜しませる

門松で迎える宿の客となり

御祝儀の手前の指切あほくさし

尼崎市 長谷川三司

歯が抜けてから笑わない人になり

火事見舞帰りは寒い風をよけ

兵庫県 若林草右

一寸先は闇と八卦見いのこし

一日クリスチャン町を埋めバーを埋め

広島県 山田季賛

病棟の廊下掃く職強く生き

岡山市 田村藤波

好漁の夢はローマの空を飛び

生活に困るエプロン白すぎる

岡山市 岡田夜潮

がしんたれと言われ商魂培われ

連れ立つも遊妊のおかけと初芝居
もっと鶴が立ってほしい混浴

児島市 本田恵二朗

金婚のちよこなんとして床柱

かくし芸モウと一と声鳴いておき

とんがった声も肉親なればこそ

京都市 松川杜的

臍くりで買うのに許可を仰ぐ妻

一の鳥居で脱帽さされたその昔

猷納の鳥居錦ちゃんの名も並ぶ

銭湯の籠も皆番号をうばい合

道問えば猫背の尼の話し好き

鳥取市 森本法泉子

急行で酒持ちこむも十二月

元旦の車窓は煙るのもよろし

各駅停車故郷に帰る日は嬉し

夫婦かと思えば別の駅で下り

倉敷市 松村万古

スタートは遅れてもよい寝正月

お祓いをしたらと思う初議會

縛られたのじゃないテープ切る写真

岡山市 津田麦太楼

十二月利支の短冊売りに出し

若旦那さすが素性の袖だたみ

親馬鹿のサンプル見せて父子辞め
丁重に敬遠されて淋しけれ

吹田市 橋本幸男

ポーナスをも一度ほしい子沢山

女医さんの告白甘い甘い恋

堺市 高崎雄声

折込みが買え買え買えと十二月

型くずれせぬハナが羨やまれ

かけ取りへわしは養子と言っておき

島根県 藤井明朝

子の出来ぬ理由晩酌愚痴となり

追羽根は洋装組に負けつづけ

学生の良識修身欲しいなり

岡山市 永松東岸

金持から見れば阿呆の中の僕

妻として哀れ噂を否定する

副業を探さんならん産婆さん

倉敷市 野田素身郎

御用始め遊びたりない顔で出る

日本が負ける映画を平気で見

入院へもうその席を狙っとり

大阪市 清水望峰

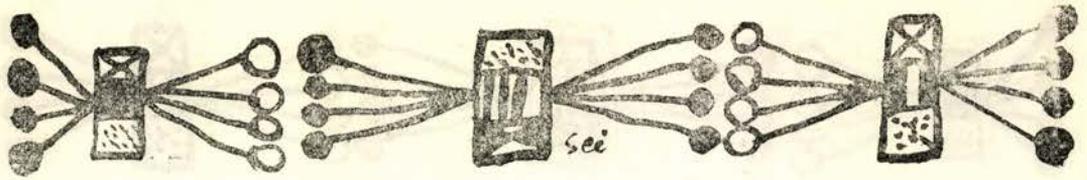
もう猫を抱きたがらない娘になって

子のスリル砂糖のつぼのふたをとり

大阪府 伊達堰子

たくみな話術で女終点まで喋り
年忘れ待ってましたと連れが出来

大阪市 不二田一三夫



病院だけの看板が立つ通過駅
なんの字を引いたか遺書の横の辞書

兵庫県 酒井ひか平

妻病んで知る正月の味気なき

まだまだと初老自分に云い聞かし

宇部市 津秋 六花

ブラカードみんな喰えない顔でなし

貧乏を蹴散らす度胸だけ残り

神戸市 丸川 初甫

坐り直して女嫉妬の顔になり

おみくじの吉観かれた初詣

岡山県 池田 古心

旧家自慢背戸の大木よう伐らす

大阪府 早川 清生

線追うて妻を脱がせる人形師

同棲し遊びに来てねとも言えず

わが校が負けて喧嘩をして帰る

聖女役終えたスターにただれた夜

ジャンジャン町窓から将棋見て飽かず

大阪市 武部 若菜

無遠慮な目が追いまわす日本髪

何んで旗出すのときかれたり

甲斐甲斐しさ母のような児がいとし

がんとして下座に女らしういる

堺市 辻 圭水

借家住いしてもスキーのゴルフのと

上役が破るで罰則くずれて来

児島与呂志

情熱がほとばしるよな筆のあと

戦歴を酔えば語れる彼と飲み

朝寝するつもりペンあり枕もと

岡山県 野々 口美舟

ライバルにもたれて歌うたんこうぶし

持ち前の短気をあなたにはみせず

西宮市 小浜 牧人

ワンマンの取り得は情に脆いなり

唾に似てムード喫茶で向かい合い

ひっそりと雌伏のひとへ梅が咲き

豊中市 菱田 満秋

空室がこんなにあつて権利金

幸運をみてほしい掌を拭いて出す

兵庫県 前川 左文字

団地族に連り背伸びして暮らし

横町の楽書復古調となり

大阪市 橘高 薫風子

冬晴れて見馴れし山も高く見え

雪皚々湖一つ埋め残し

下関市 中村 九呂平

真白い花が怒りをやわらげる

空びんの菊一本が寂とさせ

奈良市 宮口 笛生

仁王さん写真へ納まる顔でなし

陽だまりでほとんど禿げた散髪す

大阪市 西川 晃

ドンキホーテだったと憶う我が亡父や

末座から言えば屁理屈くさくなり

釜ヶ崎風景

大焚火俵浪者どんな夢もつか

名古屋 野田 一念

十二月積極的に借り歩るき

金庫より出したい様な数の子よ

日本髪やっともたして初詣

神戸市 仲 どんたく

パチンコ屋の隣と云えばすぐ分り

数の子はやっばり出ない部長宅

平田市 久家 代仕男

口癖を数え講義に倦きた顔

懐は淋し庶民の味で飲み

自嘲とは淋しいものよその微笑

大阪市 本多 柳志

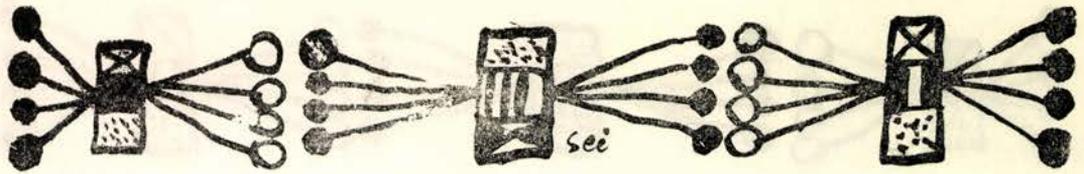
正月着去年のわるき叱っとく

平凡な年でありたい初詣で

出雲市 原 独仙

姉の恋奪って小説以下次号

ふるさとの山川文化に傷められ



映画より炬燵がいいと妻も老い

大阪市 大谷月都

若さ失うまいとして伸び悩み

お正月めん鶏一羽が生き残り

岡山市 江国幽谷

悪阻の背撫でてあんじよ敷かれとり

ふと見れば妻が経済欄を読み

一級のように思えたもらい酒

岡山市 光好陽子

もう少し愛きょうのあつてもいい娘

傷心を三流館でまぎらわし

尼崎市 徳永鬼美

水漬を気付かぬ年になって禿げ

出不精の母へ孝行なりがたし

象きょうも腹の立たない顔でたち

西宮市 河相すゝむ

虚勢張るほどに足並揃うてず

生活展かくありたしと思えども

体面を云うほど俺も出世した

あれこれと本積みあげて満ち足りる

西宮市 野呂鶴汀

古都奈良の日暮にふさわしき煙り

十代が眩しく昼に出るホテル

西宮市 樋口舟遊

廻り年せめて小鯛を買うときや

新潟県 高野むじな

ムードとやら溜息混りの歌うたう

電話掛けただけで妓を喜ばせ

大阪市 欄蘭

お守りを持って旅行をするも輪

ソーセージ輪切りにしたよな月の裏

大阪市 石倉旅風

この人もさくらにかかる暮の街

死期を知る人の言うことききたまえ

飲み助の芯を知らないから嫌い

ほたん雪降るに任せる渡し舟

大阪市 魚住満潮

この辺で足を洗おかと刑事

お務めは富士かメトロか終電車

別嬪の娘に家中中ぶらさがり

自首の肚決まって一晚飲み明かし

一枚の背広それさえ質にあり

逮捕状へタオルちり紙ハミガキ粉

小細工が腹の底まで見透かされ

おどす気のカス心中で死んでいた

襟足へ男の視線みだらすぎ

智恵をつけられたか女強く出る

検温器去年の熱が残ってた

愛媛県 村上旭童

出稼ぎの目にアベックの多いこと

損をせぬ程度におっとりかまえたり

倉吉市 大前鳴光

質問に窮し母親欠伸する

鳥取市 北村三歩

ほろくそに云うので此奴買いよるで

ハンマーのたこ温泉のなかで撫で

遊星退職

喧嘩したこともさかかなに飲みあかし

倒産の春にも賀状送って来

パチンコ屋に打球組合なるが有り

等岡市 木山遠二

初めて方大氏を訪う

標札に方大とあり襟止す

初対面の夫人の既に隔てなく

和やかな話のまたも師の上に

大阪市 村山光輪

反り橋の晴着初日に燃えるよう

初詣で岩戸景気の列つつく

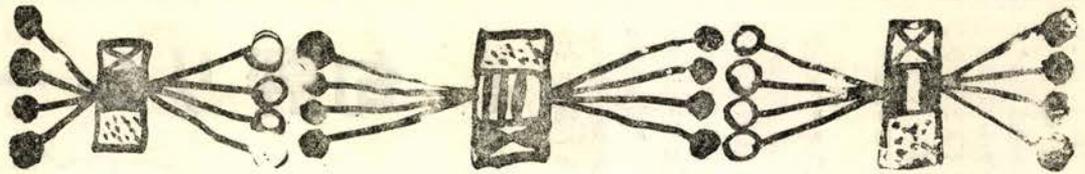
姫路市 植村客遊子

パチンコの顔ぶれも居る競馬場

オーバだけ課長級のを買うておく

素人のカメラほんとの齡に撮り

岡山市 宗高矢寸志



大学を出て週刊誌しか読まず

大阪市 河井庸佑

決裁は女社長の太っ腹

ハンディも知らぬ社長がクラブ振る

大阪府 谷沢好祐

心斎橋相合傘ももう見えず

銀婚の旅新婚の跡を訪い

泉大津市 高津徹也

ピースと葉巻すでに相手を制しけり

愛媛県 榎紫光

うさばらしするおでんの酒にむせ

好きだった娘ゾロゾロ子を連れて

青森市 工藤甲吉

親からの鼻を整形外科で捨てて

拾われもせぬアルミ貨の我である

台湾は外国だったバナナの値
玉野市 伊原明林

ポーナスはただ一陣の風だった

官報を斜めに読んで判を押し

よその酒ばかり飲んでて松がとれ

西宮市 門永三舟

生嚙り主治医黙って聞いている

懇談日母の化粧の厚過ぎる

大阪市 藤村梨花

ブローチへそつと手をやり夢があり

年新らたやっぱり数え年が出る

相生市 富永夢路

ねむれぬ子母へ小さく話しかけ

買うてやる約束素直な子の寝息

神戸市 室田千尋

字の読めぬ母できびしい躰なり

ほほ笑んで程のいいのが不安なり

うすい髪きちんと分けた身躰み

トランクの何やら落したそがれる

西宮市 山本一傘

好き好き好きうちの娘がもう覚え

銀行を出てからむつつり歩き出し

奥さんの自信が二号には憎し

豊中市 林夢虹

春の陽を掌に受けている盲少女

恋江市 舟木与根一

うっかりと心臓麻痺を羨みぬ

運不運あるとは見えぬ高島田

慰謝料もぼんと出せるから別れ

恋江市 小林孤呂二

ゴーストアップ遅刻しそうなのが揃い

日曜をつかい尽した花鏡

同舟近詠

道中 恋江市 前田伍健

居眠りが趣味と重役気の毒な

ハイヒール女傑そもそも気に食わず

片言の如くノリトはうやうやし

須坂市 高峰柳児

集金を帰した手際ほめられる

臍くりの株も下落の倦怠期

雪模様うどんの湯気が窓を這い

戦後派の社長腕力鼻にかけ

今治市 長野文庫

失対の人夫替え歌名作者

予備校でさえ選り好み出来ぬなり

肥え気味に修正たのむ額写真

酔った時丈け意気投合の肩を組み

はね飛ばされた位ニュースにならず

和歌山市 秋月宏方

恋知らぬ頃は風さえ引かなんだ

さっそうと美粧院から出た頭

満六十一才の春を迎えて

喜こばんこの身この手の健やかさ

大洲市 米沢曉明

押ボタン急患という音で鳴る

利用価値あると見たのか酌いでくれ

良心と別に政策第一義

何時見てもごまかしのない山かたち

新居浜市 月原宵明

人の子を教える筈が鉢巻し

天才のその後はアル中との噂

故郷へ降り駅長にお辞儀され

句評リレー



右

雪を見てその清潔に目を閉じた

妄夢

晃川柳に新しい境地を持つとうとする作者の意欲は高く評価すべきだが、此の句の「雪と清潔」は余りに付きすぎて（比喻が常識的であり過ぎて）句の価値を半減していると思う。「雪を見てその……」と云う詞も冗漫とまではいなくても、思わせぶりな気障っぽさが感じられる。下五の「目を閉じた」は作者の個性がはつきり出ていて佳い。

七面山は頂げる句です。あくまでも白く、そして清純な雪を見て人間と云う俗物の心の中の汚らしさにつくづくあいそがつきたことであろう。しかし、「清潔に目を」が「清潔さに目を」と「さ」が一字挿入されれば一層この句は落付と重量感を増し、句の価値を高めるのではあるまいか。句主も一応その点については深く考えぬい

大阪市

西川 晃

岡山県

直原 七面山

新潟県

月原 宵明

山口県

国弘 半休

新潟県

高野 むじな

た結果だとは思いますが、もし晃氏の云われるように「見てその」が気にかかると思えば「底知れぬ雪の白さに目を外らし」とでも詠みますか。

宵明は純白の雪に対し混りつつある自己の良心が目を閉じさせるまで考えさせられるこの点七面山氏評同感。「目を閉じた」で美しさを愛する人間性が充分に表現されている。然し中七「その清潔に」はどうも説明的であり理屈っぽい感じがしないでもない。

半休は作者の着想から見て頂げる句であるのに、上五、中七、下五が附着しすぎてるので私にも晃さんや、七面山さん同様表現方法に異論がある。併し川柳の一つの枠に嵌め込もうとして云っているのではないから作者の個性がこれだけ承服出来ないとするならば、これで結構である。むじなは着想もきまり切った事ながら新

しい感じだ。「雪を見てその清潔に」はよいが、目を閉じたが一寸気になる。下五、結びが何か散文的になってしまった感じだ。但し清潔さと、「さ」を入れると尚散文的になってしまふ感じが強いと思う。雪の白さから心理的な清潔さを感じた心を表わす適当な詞はないものだろうか。

晃は「目を閉じた」によって複雑な作者の心の動きを暗示しているので決して悪くはない。散文的云々は此の場合私の意見は省略する。問題は「花は紅、柳は緑」と云った式の概念的な物の観方が「雪」と「清潔」との結びつきに感じられる事で、ずばり云えば使い古された表現法だと云う事である。又「雪を見てその」と云う表現は英語の直訳の感がある。この様に種々の疑問点を持ちながら、此の句が尚、読者に強く訴えるものを持っているのは、これが単なる思いつきでなくオリジナリティな心の体型から、つまり深い処から発せられたことばであるからである。「清潔さ」と訂正するのは句意を弱めるだけである。

七面山は「心理的な清潔さを感じた心を表わす詞は……」とむじな氏が云われる様に清潔さのさかどうして必要に思われます。なぜならば「さ」はその度合を計るものさしであり、しかもここではその下五の語意を強める重大な責任を持っているものですから。

次にこの句を読み返せば読み返す度に、最初にこの句から受けた感動が段々薄らいで行くのは一体どうしたことであろう。どうもこれは句の内容の浅薄さによるようにだ。もしそうだとすればこの句をそんなに

むきになって兎や角論する価値も必要もないさそうだ。句主には御気の毒だが僕はこの句をスタイリストの作品と断じたい。従って晃氏の言われる作者の深い所から発せられた句とは受取り難い。

宵明は諸説参考になった。この句はたしかに散文的である。それでよいのでは無かるうか「その清潔に」についてはどう考えても適当な字句がない。さかを加える説もあるがさかを加えても変りばえもなく却ってぎこちなさを増す。原句以外にないと断定した「目を閉じた」で飾り気無い率直な気持が現われているし、句全体から何所となく品性高い作者の人格が窺われる。佳句とまでは行かなくとも。

半休は雪の降り積った景色、昔から云う「銀世界」だ。この句主も亦そこを詠んだものであるう事を前提として私は批判しているのである。そこで最初表現方法に異論ありと申上げたのだが大方の諸氏も御同感である様に思われるので、この辺で具体的に異論を打ち明けてみよう。先ず上五「雪を見て」に表現不足を感じるし、中七「清潔」は清潔と云う熟語を持って来た事にぎこちなさを感じる。更に下五「目を閉じた」には若干矛盾を感じる。以上が私の分析であるが、このままで読者を打つものがあるとするなら「山下清も亦画伯なり」でいただこうと云うのである。

むじなは清潔にさかを入れる事には矢張り賛成出来ない。雪と清潔が使い古された表現法ならば尚更清潔にと打ち切った所に平凡の感をまぬがれて居るものがあると思うし、清潔を強く感ずる。

心中の女の顔を蟹が這う

満潮

鬼日心中をシンチニューと読めば主観的な句になり前衛派の川柳に近いものになるが、此の句の場合、心中一情死と解するのが自然であろう。主観を殺した非情の眼で、対象の真に迫ろうとする作者の気魄は感じられるが、三説四説虚構の痕がざらついてくる。クローズアップされた映画の最終場面を見るようで映画的手法を表現に採り入れたものと思われる。

七面山日えげつなきがむき出しで、女性がこの句を読めば川柳が一べんに嫌になるのではなからうか。此の句からは何一つ美的なものも見出せない。もし非情句と云うものがあるとすれば、この句はその雄たるものだろう。女の屍体と蟹の組合せは奇技である。この情景をスクリーンに映し出されたら、誰しもその醜悪さに顔をそむけざるを得ないだろう。迫力は確かにある。

宵明日前二者と同様たしかに映画型だ。心中でなければ松竹映画独特の海女ものもありそうな処、現実と真相の緊迫感が盛りだくさんで、この句から欠けるものは冷酷と陰惨さが強烈なので醜悪な句が強く、後味悪さを感じる、情死体と蟹……。このような冷静な観察と厳しさは必要であり、他の場合に成功する句はある筈。

半休日作者はどう云う意図があつてこうした情景を捉えて川柳したか!?。もし課題吟とするならアマチュア写真に見る無責任撮影を「写真芸術視して世に批判を貰うのと同様なそしりを受けるもので、少なくとも

もこうした取材から生れる句からは「哀れ」とか「無情」と云った感情を伴うものでなければ、このままでは何等人間性がなるとしか受けとれぬ。

むじな日一説ドキッとさせられた。映画ではこれ程はつきり表現出来ないであろうと云う点で映画のシーンとは云えないと思ふ。(表現出来ない)と云う意味はこれ程無惨な姿を視覚に訴える事は適当でないという意味である)文字で表現する非情の観察としてもギリギリのものであると思ふ。但し蟹が顔を這うとは虚構の感が強い。

鬼日作句態度としての非情とは主観や主情によって現実を浅く掘ってしまふ従来の方法と違って極端に主情主観を押えて、事象そのもののポリュームによって、より深く現実を捉えようとするものであつて所謂、非人情とは全然別箇のものである。豆秋氏の句に「寒いとこよつて乞食の子が座り」というのがあるが、これは決して作者が非人情だと云うわけのものではない。一般の概念には当て嵌まらないが此の句の中にも非情の(ややニヒルな色調を帯びた)美はある。然しこの句はカメラ的視覚の句であり、内容の深さが余り感じられないのが欠点である。

七面山日柳味の点はどうだろう。豆秋氏の「寒いとこよつて……」の句とは月とスッポンの感じがします「非情の美」にも一応疑問が残る。柳味を加えて練り直せばもっと立派な句が生れるのではないか。確かに虚構の句いは濃い。若し絵にでも描けば面白からうが床の間にかけられる訳にも行くまい。

「心中死体の影を小蟹が這いまわり」とでもすれば冷酷さと陰惨からは多少救われるが迫力がなくなるし。

宵明日魂は天国に、現実が醜いむくろ：虚構とは言わぬが美を愛する人間性からはその取材を憎むと云う結果になって来る。現実を深く強く掘もうとすれば冷酷な写生句になる。然し乍らかすかに非情の美を匂わしてはいる。非情の句故に川柳味なしとは想わぬが醜悪な視覚がいつまでも残るのは「写生」の幻惑でしょうか。

半休日まあ死人の句なら古川柳の「南無女房乳を吞ませに化けて来い」と云つた所でないといやしくも人間ですすからねえ。

むじな日非情の句も良いでしょう。川柳は人情の機微を穿つたもので事物に愛情の目を持って見るものであつても時には非情の句も非情の美しさも許されるのではない。但し作り事めいた感じが非情の句だけに尚気になる、虚構の真実が感じられないとでも云うか。

盆栽の如く社長の目にかない

梨花

抗感をうたつたものと解したい。
七面山日句意は恐らく鬼氏の仰言る通りであろう。或は抵抗でなく自己を卑下してのもの云い方であるかも知れない句意から押して「盆栽の如く」なれば「社長に愛せられ」となり「目にかない」ならば「盆栽として社長さんの目にかない」となれば語調のぎこちなさが多少でも救われるのであるまいか。

宵明日私は客観句と解したい。社長に認められてはいる女社員を同僚が羨望も混ぜて小憎く批評したものであつて理性もブライドもなく云いなり次第の、全く盆栽のような女、異性から見ても新しさも魅力もなく、同性からの人気もない、只々盆栽のような処を社長が買っている。と同僚の批判と負け惜しみを遺憾なく現している句である。

半休日「社長の目にかない」が良くきて居るので、これは世に云う女秘書か或は〇身におさまつたのだから。何れにしてもただ事ではない。して見れば「盆栽の如く」が少し問題だ。「趣味として盆栽が好き」程度にこの女性が扱われたのでは我慢出来まい。親の愛情の様を「舐積の愛」と故事にあるが、この句にも、何かこれに匹敵した言葉はないものかな。

むじな日社長の気に入られる為の自分自身の気づかひに對する自嘲とも云えるし、其の様な同僚(女とは限らない)に對する皮肉を含んだ感情とも云いたい。目にかない事に対する現世的な利点にも拘らず不満を含んで居る点古く又新しい川柳の心である。

鬼日宵明氏が云われる如く此の句はおそ

らく客観の句であろう。然しそなたとすると表現が平面的で、一応川柳として技術的にうまくこなしたなと云う程度の感銘しか受けない「益裁の如く」と云う比喻も主観の句であって初めて複雑な陰影を持って来ると思う。作者快心の作ではないかも知れない。

七面山 此の句は「〇〇の如く……」

に「かない」の連けいが句の強烈さを倍加している。で原句のままだと句品と云うか句の格調と云うかそう云った面で、僅かではあるが好もしからざる感情を呼び起すようだ。この点句主も表現技巧の最善を払われたであろうが惜しい事だと思ふ。句主はいずれを詠まれたかは分らないが、僕は男性としてなら頂くが、女性としてなら真平御免である。従って僕は男性が女性かについてこの句の価値に格段の差を感じるものがある。

宵明 僕は矢張り客観説を固執する。女性を誰かが批判したものと解する。自分を卑下自嘲するには白々しいと思われ、矢張り第三者が苛酷な比喻を投げた場合を考えさせる。

「益裁の如く」は飽くまでも愛玩受動の形容詞のようであり「目にかない」の叙法は軽い意味に解され又常套的な対女性用語とも思ふからです。

半休 此の句は「益裁の如く……目にかない」で女性と云う風にとれたのであって益裁一女性なりと断定は出来まい。併し益裁を鉢植の草木と解するなら「益裁」から来る感じは可憐な女性が愛らしい子供位に思えるのも人情か。

むじな 男性説賛成、作者の性別は問題でなく男が男の目にかなう半面益裁のように小じんまりしてしまふ人間の淋しさか抵抗の様なものを感じる。益裁必ずしも女性を表わさず、宮仕えするものの悲哀は時に益裁に比較される事もないとは言えぬ。

お化粧しながら女患死ぬ話

友子

兎 此の句の狙いは良い。死の予感に怯えながらも尚美しくありたい女性患者の状態を描写して一応成功していると思ふ。「女患」は「患者」でいいのではないかも考へて見たが矢張り「女患」とせねばならないだろう。

七面山 此の句の狙いはむしろ女の凶太さ大胆さ、無神経さにあるのではないだろうか。お化粧しながらいと軽やかに死ぬ話などやる芸当はとも男共の出来る業じゃない。女患は女でいいのではないか。女の方が語感もいいし無理に女患としてその悲哀を強調する必要もなからう。

宵明 兎氏説、絶対に「女患」でなければいけないと思ふ。蝕ばれた女患者でなければこの場合「死ぬ話」の悲壮さがなにも別居して世を憐んでいる人で、死を恐れず生の執着も綺麗に諦めているように云い乍ら女の身だしなみを忘れぬ女患の心理を把握している。死ぬ事を口癖に云うが、本当に死を覚悟しているかどうか、微妙な心理を衝いて佳句。

むじな 女患賛成、化粧しながら死ぬ話とは生に執着する女なればこそ、死を軽々

しく口にするのは女の本能のようでもあるが、此の場合、病人は生への執着が殊更に強くなり生きる欲望が強くなって来る、死を語り、死を恐れながらする化粧、生きる欲望につながるものであろう。

兎 七面山氏の説の如く、此の句の狙いが女のずぶとさか無神経さにあるなれば「女患」でなくても「女」でも良いだろう。然し此の句が訴えるものは女の宿命の哀しさである。女性はいつも誰かに愛されたい。その為には常に美しくありたい。これは死を恐れる心と同じく本能なのである。作者がそこまで意識したかどうか分らぬが、死と云う、毅然たる不可避の線を意識しながら不死（美）への憧れを持つ人間の哀しい心なのである。

七面山 女患論者ばかりのようですが僕は断然「女」でよいと主張したい。これは句の持つ内容の吸収方法に根本的な差があるから論が分れるのであろうが、これは決して悲想句ではない。若しも此の句を十人に示せば十人に悲想感を与えるであろうか、むじな朗らかさ明るさ、他愛なさを感ずる人も居るに違いない。たまたま死の話をしたのが女患であっただけの事なら女でも事足りる話である。この句は決して死との対決から生れたものではありません。この句の良さは「お化粧イコール死」といった点、即ち女に取って死ぬ話もお化粧も日常茶飯事だと云うところにあるのではなからうか。従って宿命論を振りかざす程の句ではなさそう。僕はむしろ女性の「死に對する諦観句」として頂きたい。

宵明 七面山氏説よい所を突いていま

す。けれ共この句から悲壮感が無いとは言えない。女患であり女患等であればこそ、化粧することに悲壯な朗らかさがあるの、若し一般女性とすれば「死に對する諦観句」とは受取り難い、死を身近に覚えている女患なればこそ平気で「死ぬ話」が出る。だから私は女患が正しいのではないかと思ふ。

半休 病床を見舞って貰い泣きし帰える、このような事は何も女患に限ったことではない。男の場合でもある。そこを女患とあるので悲しみもその極に達した。これに優る言葉を知らない。女患が良く利いている。単なる「死ぬ話」に皮肉と滑稽味を加えて、川柳の持味を遺憾なく發揮したものと云える。

むじな 普通の女が云う死ぬ話と女患の死ぬ話では全く相違する筈だ。病氣した者のみが知る生への執着がこもったものではないだろうか。死を身近に感じ乍ら化粧する女、健康な女が化粧しながら死ぬ話をする場合もあるかは知れないが、何かすぐわかない気がする。

生活改善という下駄箱の花

藁流

兎 此の句は生活改善と云う大きな問題と下駄箱の上の活け花と云う軽微なものを対照させて、其処に生じる矛盾を衝く穿ちの句で川柳の表現形式としては常套的なものだが、句の底に小市民の悲しみとか抵抗感のようなものを内蔵して、肉面的に新しいものを狙っている意欲が感じられる。

七面山山鳴動して鼠一匹の感なきにしもあらず、此の句はあまりにも省略し過ぎていてではないでしょうか。ひねくれて云えば下駄箱の花は生活改善と云う名の花ですととれて……。こんなひねくれた者にも納得出来る表現は出来ないものだろうか。#下駄箱に花瓶を置いて生活改善#とでも云った風に……。

宵明二生活改善と大きく叫ばれているが、それらしく行われたのは下駄箱の上の花であったと云う皮肉の句として頂く外に余り感興を呼び起さない。

半休二いい処に気がついていてのだが「下駄箱の花」では尻切れトンボで惜しい。淮敵の余地がある。課題吟の場合題そのものを詠み込もうとすると兎角こんな無理をする傾向がある。

むじな二狙いは良いが破調が何か云い足りなさを感じさせる。下駄箱に花を活けただけでは生活改善が泣くだろうし生活改善の一つに下駄箱の花では一寸軽い気がする。

晁二生活改善実践の第一歩は僅かに下駄箱の上に花を活けただけ——これは決して軽い皮肉ではなく、生活に喘ぐ庶民のわびしい吐息であって、大衆の日日の営みの一端がうかがえると思う。破調であっても、これで成功している。花を最後に据えたのも、作者が句の焦点を花に絞った為で決して無理したのではないと私は思う。#下駄箱に花瓶を置いて生活改善#では、余りに説明に過ぎる。

七面山二小市民の悲しみや抵抗を窺い、生活に喘ぐ庶民の吐息が聞える程の深味あ

る句だとは僕には思えない。句が色々の難点を持つている句とは間違いないさそう。今一度句主に生活改善という問題と真向から取組んで、より以上の佳句を生んで貰いたいと思う。実力ある作家なのだから。

宵明二皆さんの評につきていて。この句から受ける感興は乏しい。いささか焦点がぼやけているように思う。

半休二「生活改善改善云うて下駄箱の上に花を活けるのか」とこれを十七音字に縮めたらどんなもんだらう。やはり原句並のものかな？

むじな二生活改善とさわざながら何も出来ないのが我々の姿に違いない。其点何か外に生活改善と云う大きな問題に対して、やっと思われているに過ぎない事柄を捉えたら成功したのではないだろうか。

髪をなびかせて女遠くを見つめる

白柳

晁二与謝野晶子の「みだれ髪」を想起し大正期のロマンチズムを感じたが、然しロマンというものは時代を超えてみずみずしい若さを持つものだから、ロマン喪失の現代にはこのような作品は尊重さるべきであらう。然し川柳の要素として社会性とか批判性を望むなれば此の句にはそれらの要素は具えていない。

七面山二どうもこの句にはゴツンと来るものがなく、喘みしめて見て、喘みこたえを感じない。そうですか、それでどうしました？と尋ねてみたくなる。酒で云えばコクがないと云うのか。この句、次代の川柳の示標となるべき句かも知れないが、今の

私ではそう断定するだけの知識を持ち合わせない。#髪をなびかせて女遠くをジッと見つめる#映画のシーンに良くこんな場面が出来ますね。

宵明二躍動する若さ、新鮮さ、希望に燃える女のプロフィール。芸術写真か映画の一とこまか、遠くを見つめるその瞳に未来への憧憬と愛に輝いている。この中からひたむきな女の情熱が、湧き出しているようである。このような未知の世界への暗示の句も又よいであろうと思う。

半休二背景は成程映画のシーンかポスターの取材になりそうな処であるが、それは一幅の絵でしかなく、我々の生活に縁遠い感がある。

むじな二髪をなびかせて遠くを見つめる。それからの発展がほしい。それで初めて女が生きて表現されるような。十七音字に表現するには至難かも知れないが、今一歩で初めて其の人でなければ出ない持味が出て来るのではないだろうか。

晁二所謂川柳的な句ではないが、豊かな詩情を酌みとるべき句で、生活とか政治や経済と云ったものを排除した、情純な美の世界を創ろうとする、所謂純粹詩の立場から発想された句だから、鑑賞眼を其の観点へ向けねばなるまい。

ポードレルは「詩が歌おうとするものは只実に漂渺として捉えがたく、夢のように説明の出来ない所の、不思議なむず痒い心の衝動である」と説明している。

然し此の句が川柳の一方ではあっても、未来の川柳を指向する程新鮮なものではない。将来の川柳はもっと高度なメカニ

ズムと批判性を持たねばならぬだろうと私は思う。

七面山二奥深さを持ったような句としては好例であろうとも、この句の背後の実態を掘むのにはもの足りないような気がする。物語りのプロローグだけで後は観客任せと云うような不親切と横着さをこの句から感じる。またロマンと詩情の句とは僕には受取れない。然しそれは僕が井の中の蛙であって、ロマンや詩情の不感症であるのかも知れない。だからこの句に拘めどもつきぬ甘味なロマンや醜態と句う詩情が溢れているとしても、今の私はそれを察知す能力がない。

宵明二一応論議せらるべき句であろうが抹殺すべきものではない。句にあふれる詩情に香りがあふれる。是非識者にこの句の解明をお願いしたものである。

半休二この句の言外に含まれている色々な感情が「希望」一筋のものであるのか、去り行くものを追慕する哀愁の情景であるのか、どちらを選べば良いのか？ そこがこの句の難点ではあるまいか。

むじな二云い切つてしまわないうで思わせぶりの言葉から詩情だのロマンだの、希望があるのと云うのが文字か？ しかし十七音字で何意の動かない表現をするのも川柳ではないか。句評全般から云って、作者の意図と評言の喰い違いのひどいものもあるのではないだろうか。無論小説にさえ、書き不足、読み違いの論争はままある事、十七字詩の川柳においておや。詩情や希望を想像させる句も川柳にあっていいだろう。思わせぶりにならないような。

柳信 頂上会談



アイタラフルシチヨフの
頂上会談より一と足おき
に、こちらでは二巨頭のテ
ンペン会談(頂上会談)を、
お目にかけることにいたし
ます。
—編集局

白柳・豆秋

白柳さんへ

須崎 豆秋



家肌の人が多いようです、そう思
いまへんか白柳さん。

かはる、……等々が割り込んでき
て「光笑会」という、いとも明朗
な川柳会が生れ、毎月「カナメ喫
茶店」で句会を開き、川柳を放談
し、どここの句会ででも気がねして
か、「禿」という出題は無いらんだ
が、「光笑会」の兼題は毎月「禿」
という題で通し、禿頭を謳歌し合
って、よろこんで居たんだから、
たわいのない話だったネー、この
スカタンな、いとものんきな句会
が約五十年も続いたんだから、よ
かれあしかれえらいと思う。

本格的な本社句会とか、支部句
会、というものは、作句練成の道
場とも言うべきもので、こうした
真剣で真面目であるべき句会の席
上で、ザワザワと雑音を出して傍
若無人の者が、若しあつたりする
と、初めて句会へ出席した人と
か、純真な青年層へ、あいそをつ
かされる結果となるんだから、句
会での雑音は大いにつつまねば
ならんと思う。

ところで、「光笑会」という別
席句会では、遠慮もいらず、手放
して、川柳を放談できるので、与
太のなかにも、気がねのない自由
な、川柳研究会でもあった。

こんど、近くヨーロッパで行わ
れる、アイタラフルシチヨフの両
禿頭の「頂上会談」にタイアップ
して君と僕とが、何か禿のはなし
をせよとの、編集局の「三夫さん
からの達しに応じたわけだが、よ
う考えて見ると、白柳さん、われ
われは相撲でいうと、小結ぐらい
などで、横綱、大関級の先輩
が、さんぜんと光っているので、
さし手がましい感がしますネ、と
いうのは、昭和二十五年の夏、
路郎先生の句碑、
名も知らぬ山の起伏をう
れしがり

色街では、「ハーさん」という
愛称でチャホヤともてるので、ち
よいといいい気になるんだが、「や
かん頭」なんて言われるのは、い
やですネー。白柳さん。

に禿げた、それから禿げること
を、「やかん頭」と言うようにな
ったとのことですが……冗談はさ
て置いて。

「やかん頭」という起源につい
ては、三遊亭金馬の説によると、
川中島合戦の折、ある夜、信玄軍
の方から、不意の夜討があつて、
狼狽した謙信軍は、とるものも
とりあえず、これにさし向つた

私は頭の髪というものは、一つ
の芸術だとさえ讚美しているんで
すが、かと言って私の頭に髪の無
いことを悲観はいたしません。

私の句に、
三十でツルリと禿げてき
た悲劇

が、その際一人の軍卒がカブトが
見つからないので、かたわらにあ
つた「やかん」を煮えたぎってい
るお湯もろとも、カブトのかわり
に頭へ冠つたので、頭がズルズル

というのがあるが、これは全た
の誇張で、むしろツンツルテン
をたのしんでいる自笑の句で、私
に限らず、禿頭族というものは、
別にこれを苦にしていけない、楽天

わかれ川柳人で会をつくらうと
いうことになり、「禿よ集まれ」
という名文の檄を飛ばしたとこ
ろ、たちまちにして集まったもの
に、緑雨さん、禿山君、や君の外
に、オブザーバーとして、艸葉、

ははえましいことに出合います、
満員電車の中などで、吊皮にブラ
下つて、なにげなく帽子を脱ぐ
と、坐席の若い学生さんから、

の建設記念大会で、奈良県三本
松の上田翠光居へ、全国から集ま
った柳人三十八名が句会のあと
で、地酒をよばれながら、懇親会
をやつた席上で、たれかが「禿の
三光」を選出して、たしかその天
が尾崎方正博士、地が岡山の服部
十九平氏で、私が人に当選した、
あの時、白柳君は選外佳作ぐら
いのごだった。

禿かくす帽子だったらよ
し給え

という私の句がありますが、こ
れは私に言いきかせている句で、
私は決してあのシニユマイみた
いな帽子は、禿をかくすためにきて
いるのではありません。

帽子については、チヨイチヨイ
ははえましいことに出合います、
満員電車の中などで、吊皮にブラ
下つて、なにげなく帽子を脱ぐ
と、坐席の若い学生さんから、

「おじさんどうぞおかけ下さい」
と席をゆずってくれたりします。

又、夜更けの旭町ジャングルな
ドを通ると、御存知の通り、右か
ら左から、夜の女に引っぱられる
んですが、私など帽子を脱いで通
ると、たれ一人として引つ張る女
もありません、禿が魔除けになる
んです。

盛夏の日でしたが、アサヒビヤ
ホールへとび込んで、ビールをボ
ーイさんへたのんで席へつき、帽
子を脱いで汗をふいていたら、さ
っきのボーイさんが、ビールをも
って、うろうろ探しているんで
す、「ここだここだ」と呼びかけ
たら、笑いながらビールを置いて
行きました、帽子を脱ぐと、コロ
ッとして人相が変っているんで、ボー
イさんにわからなかったというわ
けです。

又、こんなこともありましたが、
それは或る地方の川柳大会へ出席
しまして、あとでの懇親宴で、そ
の土地のある柳人が、私の前へど
っかと坐って、盃をさしながら、
「豆秋さん、あんたはいかにも若
々しい句を作るんで、青年のお方
だとばかり思い込んでいました。

こんど豆秋さんが、この会へ見
えたら、是非私の娘の養子に貰う
はなしをしようと、意気込んでい
たんですが、その頭を見て、ガッ

カリしました」と大笑いになり、
その人と大いに飲みかわしたこと
があります。

白柳さんなんかの禿は、職業柄
いかに頭梁らしい貫祿にふさわ
しくてプラスになるが、私のよう
なサラリーマンは、よく米客に社
長さんと間違われて、てれくさい
ことがあるんです。

禿げている方が社長と思
いきや

× 豆秋
禿は長生きをされると言われてい

豆秋さんへ

豆秋さん

「アッハッハ君ももう還暦か」
路郎先生からこの句を頂かれた
のはもう六年も前になりますね、
そんなことから勘定してみるとあ
んたの古稀も、そうたいして遠く
はないことになりましたが、十年前
もいや二十年前も、あんたは少し
も変っていないように思うのはオ
ツムのせいでしょうか、私もオツ
ムの方ではあんたにヒケをとらな
い位に光っているけれど、年令の
方ではまだまだあんたにはかない
そうもないですよ、え？ 何ぞ
だつて、そうですネ十年は違いま

るが、「光笑会」の会員のうち、
禿山、里十九、艸葉、かほる、と
既に半数が他界しているのを見る
と、禿の長生き説もあんまり当て
になりませんが、生き残っていた
からこそ、君も私も、「頂上会
談」で、映画のプリンナー以来
の、茶瓶ブームの再来の日にも出
くわすことが出来たというもので
す。

したが亡くなった人々のことを思
うと、何となく心淋しいものを感
じますね、人生五十年というけれ
ども、それも越してしまつて、お
つりをもらうようになると、懐古
趣味とでもいうのでしようか古い
想い出にひたる時が多くなります
ね。

清水白柳

すよ、君の方が上かつて、冗談じ
やないですよ、年令の割に禿げて
いるという割合いから行けば別で
すがね、禿で思い出しましたが、
里十九親分の経営していた、カナ
メ喫茶店で、禿げたのが集まつて
句会を開いたことがありました
ね、光笑会という名前で毎月の兼
題が「禿」一点張りというのも里
十九さんの発案でしたわ、集まつ
たメンバーは里十九、緑雨、禿
山、豆秋、白柳子などでしたが楽
しかった思い出になってしまいま
した、かほるさんや艸葉さんも仲
間へ入れると言つて出席していま

あの会もたしか最初は光頭会で
したが二回目からは光笑会と変え
たのですね。最初の会のときの豆
秋さんあんたの句は
禿げた工合だけは金持らしく見
えですね。そして「柳界にもこ
んな臍のような存在がたまに一つ
位はあってもいいと思います」と
あんたが書いて居られました。

酒



清

灘・魚崎

大塚合名会社醸

パーの中に入っていたことを思う
と、よっぽどむかしからオツムが
光って居たものと見えてわれ乍ら
感心している次第です。そのせい
か二十年も三十年も会わなかった
川柳家にヒョッコリ会つても「白
柳さんは少しも変っていない」と
いわれます、それもオツムの方が
少々すくなくとも自立しない
からでしょうね豆秋さんもその当
時と少しも変っていないようにネ
処で昨年の秋頃でしたが、ある
句会の席上で「川柳会明治生れの
禿ばかり」という句を没の句だ
が、こんながあると披露された
ことがありましたが、川柳の会も
明治生れの禿ばかりが集まつて句
を楽しんでいたのでは、川柳の発
展も望み得ないのではないかなど
とつくづく考えさせられているの
ですが、そうではないでしよう
か、あんたのように作句に精魂を
打ち込んで居られる人には、自然
とにじみ出る句にも、一九六〇年
代の新しい息吹きがうかがえて
心強いものがありますが、私のよ
うに句会以外では句が出来ないよ
うなもの、川柳作家としては失
格なのではないかと、このごろ心
細く思っているのです、何といっ
ても川柳家は句がいのちですから
ねこうしたことが自分自身にもよ
く判っているながら句が出来ないの

人間四題



東野大八

映画批評家

うちの新聞社で本社勤務中、三年ばかりの間、映画批評もやったりといつても、映画の方の知識はまったくない。今、考えてみるとかえってその方がよかったのかもしれない。横文字入りの技術論や、巨匠新人監督論、世界スター演技論とか、世の映画評論家エトセトラ諸氏が、うんちくただならぬところをヒレキしてござる映画雑誌などは見向きもしない。田舎新聞のこととて、読む方も気楽な方ばかりなので、ハハソソなもんかな、とこちらのいい加減な感想論も納得して頂いて、そんな映画なら今度の休みに出かけようか、といった具合。随って反論も来ない代りに、支持者も出ない。そんな無難な批評家？なので、いつかローカル放送のタレントにされてしまった。これも案外スラスラと運んだ。川柳をつきまぜての

軽口でガクのある一部識者の盲点をこそぐっていたのが効いたらしい。映画批評なんてものはある一つの印象批評なんだから、チャンバラとフランス映画を好みの角度で語り合うという点に結局落ちつくような気がする。映画評論家でめしを食い、それで通して収まっている人も多いが、よくそんな商売人になって一つの權威が成り立っているものだと、まあ私は私なりの考え方で首をひねったことだった。とにかくそんな仕事から離れ、田舎支局へ引っ込み、たまに子供連れで見る錦ちゃん映画の面白いこと。

保険勧誘員

このごろ、やけに保険の勧誘員がくる。失業しての腰かけや、停年後の小遣い稼ぎで、つながらる道はこれ一つという風にとれそう

だ。中には眼の坐ったおぼさんが、私は戦争遺家族で、主人の一粒ダネを女手一つで……と切り出す深刻型もまじってはいるが……。とにかく家庭でも職場でも、このご連中の波状攻撃には往生する。過日も休日の縁側で簡易保険の郵便局員につかまった。赤い自転車なので信用の度合いも高いためか一顧も与えなかった小生が保険論のくさりをついにぶちまけてしまった。

いいかね、今の千円は数年後の百円だ、考えてもみたまえ三年前に一万円札はあったかね。貨幣価値はその様に逐日変動昂騰をつづけている。俺が死んでも葬式代は用意してあるといつて亡くなった八十爺さんの満期保険料がなんと五十三円五十銭、ピース一個半にも足らなかつたという話がさる雑誌に出ていたが、その当節の笑い話でんで三十年掛の保険に入れるか。そんなバカな話なら、焼酎でものんで昼寝していた方がナンボ気楽か、君わかるかね。それに若い局員も参ってしまった。

うちの女房も戦前三百円の貯金があつてひどく威張っていたものだが、それは往年のイノシシ(十円)ムラサキ(百円)の世の貨幣感覚時代の話で、敗戦と同時にその金で北京では米一升も買えなかつた。現世の金で人の世の生命も

はどうしたことでしょうか、豆萩さんの爪の垢でもせんじてのましてもらったらもつと句が出来るのではないかなと思つています。おついでこの節に爪の垢を少々送って下さい、一人の川柳作家を失格させないためにネ、

豆萩さん

私なんか学問もない癖に先輩顔をして理屈を言ったりすることが好きなために、選評をやれとか、句評をせよとか言われて引張り出され、これが私の句ですと言つて人に見せられる句も持つて居らず、人からはめられるような句もないのに、ただ水年川柳にたずさわってきただけの、経験とカンだけを頼つて、先輩顔をして選をしたり句評したりしてよいのだろうかとか心細く思うことがあるのですが、これでもいくら川柳のためにプラスになっているのだから、自分で自分に言いきかせてつづけて居るような次第です。

もつと自信を持って堂々とやりなさいと言つてくれる柳友もあるのですが、どうも気が弱くてね、没句の批評などの時に、こんなのは川柳じゃないと毒舌を吐いたり、この句は作句以前の素材の羅列にすぎないなどとこきおろしたりした後では、何となく作者にすまなくて、あんなひどいこと言う

のではなかつた、といつても後悔している仕末ですが、ついその場になるとああいう工合になつてしもうので弱つています。私にも二十四五年も前に、川上三太郎先生が句評をされた時に、この句は判らないとたつた一言で片付けられてしまつて、いまだに忘れることのない出来事だ。思い出し出があることで、柳友たちの心を傷つけるような批評をしたくないといつても心掛けていられるのですが、私の性格なのか、思い上りなのか没句の批評になると強い言い方になつてしまつて仕方がないのです。これに利くよう



ヨクヨ
便箋



計れないくせになんぞ、二十年、三十年掛けの保険金においておや、これが生命保険べつ視論者の今の私の結論である。

印刷工場主任

金といえ、立所に思い出すのが北京戦時時代のことである。

北京西郊のさる会社の寮に集結していたわれわれ日僑の集団世帯群の中でおそろしく派手なのがいた。朝酒で毎日の様に水だきかしわにすぎ焼、その家の主人が内地の紙幣なら糸目をつけず買いくる。郵便貯金通帳は額面の百倍でいつでも引受けますよ、というあん配。売り食い、立ん坊の心細い連中にとってはその一家が大成金に見え今大尽にみえた。ところが市中連絡の日僑事務所の役員がとんでもない情報を街から仕入れてきた。というのは、華北中の通貨である聯銀券をS印書館という一印刷工場がいせんとして印刷を続けており、その工場連中が刷るだけ刷ってはバラまいているというのである。敗戦で紙屑同様に暴落したとはいえ、新政府の金券が入らない限りいせん聯銀券は金である。それがなければとにかく買うものも買えない不便さがある。それをいいことにその工場では夜も昼もどんどんオサツを刷りまくっ

ているのである。月給袋も過勤料も何もない、刷っているのが金なんだから従業員にとってこれほどカタイ仕事はない。工場連は仕事のきりがつくたびに一つかみずつごっそり機械の上から全紙版を頂戴して帰る、自宅でそれをハサミで切るのだ。全紙一枚から八十枚がとれて小さいの、一つ百円だ。そんな具合だから油紙に火のついたようなインフレである。百円札では手回賃もでないから五百円札にしようや、と工場長が言い出したそう、その工場長がつまり、今様大尽のあの一家の息子さんだったというわけである。「あるはずですよあなた、なんでもその息子が出来上ったその金を三日目毎にカマスにつめて運んでやってくるんだそうですから」そういってその御仁、世にもうらめしそうな顔付で、その御大尽の家をふりかえったことだった。

社会事業家

話の泉ローカル版というのにゲストで出た時の話。隣りにいる至極風采の上らない宿場人足のなれの果みたなおおじいさんが、名答につぐ名答の続出で、並居るおレキレキの度胆をぬいた。終って司会のアナウンサー氏に、あの仁はどこのだなときいてみたら、

刑余者救済で全国表彰された有名な社会事業家だとの返事。
「ふーん」とその場はそれですんだが、後日さる座談会席上でその人物に再会。その際、問わず語りとその老人はこんなことを言い出した。

「わたしは、六十余年の生涯の大半を獄中で過ごしましたが、二度目のときの十一年受刑の際、本好きの私だが一切世間と没交渉な本を読もうと決心した。小説本や講談本は娯楽っぽく多色気や欲で刺戟がありすぎて身体にも頭にも毒。そこで考えた末大百科辞典を読むことに決めました」

なあーるほど、私はそのときはじめて小膝たたいて、話の泉の名答ぶりに思い当たったことだった。セントヘレナのナポレオンは、一箱の書物が着いたとき、その船を拜んで随喜したというが、セルバンテスはセビルの獄舎で「ドン・キホーテ」を書き、ツオルターローレーはロンドン塔幽閉の際「世界歴史」をものにした。

独房十年は仙境に似たりと誰かが言ったが、ここにベンと本が与えられれば、獄中の先達学識は容易に作られそうな気がする。いずれにしても徳役十余年に大百科辞典とはまさに絶好のアイデアという他はない。

な何かいいせんじ薬はありませんかね。

とこで豆秋さん

私は自分の筆不精にはほとんど困っているのです、気のついたことを知らしてあげたいいな、こんなことを書いて出したいなと思っても、手許にハガキがなかったら、ペンが見当らなかつたら、ついそのままになってしまおうのです。出さねばならぬ返事もおくれがちになったりするので、豆秋さんあなたの筆まめにはいつも教えられているのですよ、いつでしたか私等同志十人が揃って川柳不朽洞会へ入会するときまいったときあなたから「座布団を十枚敷いて友を待ち」句が間違っているかも知れないがこんな句を書いて歓迎のお便りを頂いたのも、いまだに忘れないうです、本当にうれしかったからです。その時の十人のうちで現在不朽洞会に残っているのは、小松園君と満潮君とわたしの三人だけになってしまいました。いつまでも若い気持ちで居るのですがお互いに年をとると、出不精になるのか小松園君も満潮君も余り句会へ出てきてくれません、古い人達はしばらく句を出さなくても句会へ来なくても川柳を止めたりしないけれ共、若い人達でいい句を見せてくれる人がブツ

ッリと句を見せなくなることは本当に淋しいことです、若しその原因が吾々の選の仕方に対する不満だったり、批評の方向に誤った点があったりした事だったらお互いに考えねばならないことになると思いますが、本当におそろしいことですが、あなたでも私でも全力をつくして純粋に川柳のためにつくして居るのでからお互いに手を握って進みましょうや、何ものにも恐れずなんて、大した広言は吐けません、力のあるかぎりね、なんだか説教みたいになっちゃいましたがあしからず、そのうちまた会いましょう。

では御元気で。

おひげそりには
安全で
経済的な……

フェザー剃刀



一月十四日妹結婚 二句

今年から二挺櫓で漕ぐ船出かな <small>愛媛県</small>	竹田 きえ
倅せの瞳に天ひろし地もひろし	同
力全部ぬいて浴場一人なり	同
掌ではえが自由になる寒さ	同
お歳暮の値踏みへ母娘の寄す額 <small>大阪府</small>	高橋 尚史
今日だけは事故してなき初荷出す	同
子が癒えりや母が安堵の風邪を	同
会社とは名のみ夫婦で秘書社長	同
アルバイト年越しそばがきて疲れ <small>小松市</small>	関戸宗太郎
枚数に制限があり押し売られ	同
権威ある教授そろえて待つ予備校	同
授業料程には世間見てくれず	同
病人の特権寝 間で歯を磨き <small>貝塚市</small>	護川 梢月
ドライヤの中で覚えた鍋料理	同
ナースから邪慳にされる <small>ほど</small> に癒え	同
恋人の洗濯療養愉しそう	同
出来合をよばれて稲の出来をほめ <small>和歌山県</small>	木下 一休
同情にすがればうるさい世間の眼	同
赤い羽根遅刻の胸へすがりに来	同
逢うて帰ればコケシも嬉しそう	同
大晦日サラーマンは昼寝する <small>川西市</small>	佐伯 九紫

晩婚に双児が出来たお元日	同
新築の山に埋れて懐炉灰	同
洗剤の泡では落ちぬ生活苦	同
食べて寝飲んで寝正月あっけなく <small>玉野市</small>	小谷 仙山
御馳走を押し売されて迷惑し	同
正月がまだ来てほしく無いミシン	同
クイズ解く嫁で姑の気に入らず	同
金と時間無理する方が惚れている <small>松江市</small>	田中 妖人
買彼られすぎてもやはり腹が立ち	同
クリスマス雑感 二句	
キリストも腹立てそうな <small>ほど</small> に酔い	同
見渡せど神に無縁な顔ばかり	同
子沢山母は昼寝がしたいだけ <small>大阪市</small>	水田 帆船
最後の我儘ですと飛び降りる	同
デパートの広さ田舎の母は酔い	同
留守を訪い留守を訪わ <small>き</small> 年賀済み	同
良心に逆う受話機握りしめ <small>西宮市</small>	末沢 花美
せめて花ぜいたくに活け年迎う	同
責めている強い瞳はまたたかず	同
先輩の親切あきらめなさいだけ	同
友情の耐は特級酒にまさり <small>大阪市</small>	藤富 淀月
失業も人目につかぬ松の内	同

飯のにがき故」は、同君の中学時代の作である。当時から文学を好み性格は哲学的な重厚な、森繁とは両極端の人柄だった。

今は故人になった鴻池幸武（よしたけ）君は、十一代善石エ門氏の四男であるが、高貴な風格はやはり争えなかった。中学時代から史学に興味を持ちつつ、大阪文化の文楽の三業研究を早大でつづけ、人形遣いの「初代吉田栄三自伝」を編み、三味線の「道八芸談」を昭和十九年に編んだ翌年に歿死されたのは、本当に惜しい。生きていたら大阪文化賞は貰う人であると私は信じている。君と親交のあった武智鉄二氏に、何んとかして会って、鴻池君の面影を聞きたい。

大谷大学教授の稻葉正就君は、チベット語学、チベット歴史、チベット仏教学研究を地道に進めている。同君の私信を公開する罪を敢てすると、次の通りである。

「世間のことはうとくとも森繁

ヒゲそり後に…

●美容衛生剤G11
●アラントイン
●水溶性ラノリン

配合

男性 200日

ASTROLINE



四十年來の賀状で遠く住み	同	観光地になって入場料がいり	見島市	伊丹柳瓢子
二級酒のしきせでマッシュロ屋も知らず	同	茶道具を揃えて歳を笑われる	同	同
パパだけは他所で飲んでるクリスマス	藤田 雪峰	初恋の頃はきれいに見えた星	同	同
芝居ならここで助太刀出る喧嘩	同	お太鼓がどの御馳走も受けつけず	大阪市	宮原 敏子
まだ何か忘れたような大晦日	同	訪問着直立不動の娘に着せる	同	同
気晴らしに来た温泉がつまらなく	同	松飾りはみ出しそうな美容院	同	同
アル中に近くて黒田節が好き	青森県 木村 凉人	乳牛へ聞かせる音楽ボクの役	田辺市	室井八九寸
日本画のように残った髪をなで	同	蒼生のアンテナバルコニーの晴にみる	同	同
仕送りをさせて赤旗ばかり振り	同	賀状に追っかけ死亡通知来る	同	同
金で済む世相つくづく嫌になり	同	正月の餅を年だけ食う若さ	愛媛県	和氣 久義
雪焼けの顔を銀座でうらやまれ	美奈市 安平次弘道	酔ってるが立小便は気にかかり	同	同
子守唄違うと孫が背で叱り	同	ボーナス日十年前の妻の声	同	同
マスクミに自由奪われたのがスター	同	干柿のような夫婦で仲がよし	笠岡市	出原 真奇
ヌードショーだけが記憶に	笠岡市 木山桃仙坊	宝くじ当って名刺に攻められる	同	同
テレビまでつけて嫁も無心に来	同	嫁ぐ娘の所作が早死の妻に似て	同	同
教材のテレビで野球や相撲を見	同	混血を生んで故郷遠くなり	大和五条市	尾米 絵見
代議士の放送耳にも入れず飲み	兵庫県 河原みのる	突貫の飯場ねぎらうにこり酒	同	同
のんでねるだけの初孫またのぞき	同	宿題へママさんトラを頼り切り	同	同
カーツとしてやりました	同	計画をたてるひまなく二児三児	大洲市	富永 健朗
言うなりにになったを母の涙ぐみ	鳥取県 鈴木村諷子	新年の声で悪友やって来る	同	同
うわっ張りだけは歳より若く着る	同	借金の方だけねずみ算でふえ	同	同
鮮やかな虹の中なるわが住居	同	どう見損なつたか株をすすめに来	竹原市	杉原 愛鳩

君のことは自然に耳に入って来ます。然しまだ森繁君の映画も芝居も見えないような始末です。世間の苦勞は遠慮なく押し寄せて参りますので全く世俗を離れているわけにもゆきません。まあこれがお釈迦さまの「苦の世界」の現実でしょう」と。

ハツパ

酒井ひか平

折 過日家沢薺花さんにお逢いした

「あなた、この頃怠けてはるのと違いますか句が荒んで居りますか」との痛い苦言を頂いた。全く申し開きの出来ぬお言葉であり、「私はあなたに望みを託して引退をさせて頂いておるのに、これでは安心が出来ません」とのお話しには顔が上げられなかった。私は、どちらかと云うと、作句本位の川柳を楽しむ方である。

何時とはなしに、生活に追われ作句を忘れ勝ちの自分を認めない訳に行かない。

かつて、後藤梅志さんから激励のお手紙を頂いた事があるものの、マンネリズム化した私の頭はように復元しなかった。

その上、妻に病まれる痛手もあって、この分ではと頭を抱えて居た処だった。

「あなたから川柳を取つたら何が残りますの、うんとい句を作



ああ花のいのち短かしよう小皺 <small>鳥取市</small>	近藤 昭夫	二号でも連れて行こうか残り福 <small>羽曳野市</small>	中川 利男
ふところの淋しい父に手をひかれ <small>同</small>	同	奥さんだいにしなはれとも <small>同</small>	同
情勢を見て賛成に丸をつけ <small>笠岡市</small>	佐内 隆文	ゆっくりと寝正月する共稼ぎ <small>西宮市</small>	樋口 寿栄
目も鼻も自信があつて嫁き遅れ <small>同</small>	同	揺れ通すバスからのぞく京の春	同
倦怠期あざける様に子が三つ <small>大阪市</small>	米浪進之助	夜食来たところで残業止めにする <small>岡山県</small>	福田 祥男
生写しまだほんのうに悩まされ <small>同</small>	同	それくらいよう提げんかと <small>同</small>	同
同情はこの線までと他人なり <small>愛媛県</small>	鳥井 川鳥	松三日過ぎて新聞読み直し <small>宇部市</small>	神田 豊年
道を説く君鉢巻を解き給え <small>同</small>	同	ヒビの手へ悔なき年の除夜の鐘	同
溝一つ飛び越えるにも踊りの手 <small>兵庫県</small>	遠山 可住	わいせとぜんざい職場の釜で煮え <small>竹原市</small>	山内 静水
浅学非才だった課長がもうにらみ <small>同</small>	同	極楽へ続いているそう虹の橋	同
ぎりぎりに行けば列車も待つてくれ <small>小松市</small>	月田北海坊	女房への合戸戸棚にウイスキー <small>山口県</small>	藤本 星二
支払いが済み金庫開いたまま <small>同</small>	同	ポケットへ裸で入れる親の銭	同
たまさかに立てれば国旗入れ忘れ <small>高知市</small>	須藤 俊江	孝行のつもりテレビに母疲れ <small>金敷市</small>	小倉美音子
振袖にたすきがけするカルタ会 <small>同</small>	同	餅を待つと書き添えらる賀状来る	同
神の国十日戎のお賽銭 <small>岡山県</small>	檜原 万女	禰宜よりも巫女に目の行く初詣 <small>大阪府</small>	今西 生薑
歌手たちが歌いまくって年が過ぎ <small>同</small>	同	薬局がテレビ見ている大晦日	同
クリスマス隣りまで来たいい匂い <small>愛媛県</small>	大垣たもつ	指切りをせがめば君のたじろいで <small>布施市</small>	久米奈良子
ロープウェイ出来て落葉の積る坂 <small>同</small>	同	より添えば彼氏はちよと背が低し	同
成人の日へ胸の線腰の線 <small>和泉市</small>	井阪東天紅	御先祖がまごつく電気釜のめし <small>久留米市</small>	宮藤 慈雨
やけぶとりなどと火元がうらやま <small>同</small>	同	コスモスが一杯咲いて行きつまり	同
帰省逃がさぬ同級会幹事 <small>山形県</small>	菊地 白葩	せんべいを喰やに国賓奈良に来る <small>奈良市</small>	内海 敬太
神妙に聞いているのは下戸ばかり <small>同</small>	同	春場所のテレビ乞食に気が疲れ	同

邪が、お医者さんの注射でも可成り名の知れた売薬でさえも効き目がうすれて来た。
 年の故もあるのだろうが、風邪の方も仲々いじくり廻わされたしつこい奴がまんえんしているらしい。
 お医者さんだって「この頃の風邪は」と筋縄で退治出来ませんな」と半ばこうていされる処をみると相当の進化をして居るに違いない。
 川柳だって、それに近いのではなからうか、十年前の川柳と現在の句が同一であつてはならないのは勿論であるが、ややもするとそういう安易感を知らず知らず身に付けているという事はなきにしもあらずと思われもする。原始的なみず療法当時の身辺から、デラックス時代にまで変転して来た世相にのって行くのは、それだけ

コーヒの味

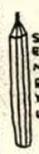
モダン 川柳

心 芥橋大丸北の辻東へ

御 門

TEL 6684

御集会には階上御利用下さい





才女たる妻ワンマンであらせられ	宮崎市	野口卯之助	馬鹿になって暮せと年賀のつけ	大阪市	西浜	青路
追い羽根へ妻は小皺を忘れて居	布施市	坂上山椒坊	焼け易く手頃に瘠せて死ねもせず	笠岡市	谷本鈍愚坊	
もらい風呂おつぎの人へくべて	大阪市	中西兼治郎	責任のないのが体よく云っている	広島県	山内	房子
都会とは三角形の家が建ち	奈良市	絹下 南天	住み心地ねずみも知ってくれて	大洲市	横田	放人
花名刺妻にやかせて見るも年	愛媛県	菊池喜与史	岩戸風庶民に吹かず年が暮れ	大阪市	齊藤	さかえ
お正月テレビが晴れて上座なり	布施市	春田 鎮海	深呼吸するところない家に住み	大阪市	福井	昭
味知らぬ輩はピカドン持ちたがり	茨木市	高木繁太郎	二次会が女将の智恵でまた変り	倉吉市	奥谷	弘朗
初釜は晴着まばゆい眼正月	大阪市	村上 和楽	ありそうなのに見入る十二月	大阪市	白石	由美
カレンダー大事にめくる年始め	岡山県	鳥取 周甫	元旦は跳ね廻れない娘のたもと	西宮市	川村	山友
ズバズバと鋏が動く嫁ぐ前	愛媛県	河本南牛史	戎さん商売繁昌の見本見せ	堺市	富山	雪山
税務署で喚き柳誌に筆揮う	神戸市	吉田 隆史	ハイヒール親の墓参もせずに去に	玉島市	井上	旭峯
裏庭のデコボコ春の水を溜め	岡山県	若柳花乃子	初詣でお互い家族連れで会い	西宮市	酒井	丹謠
煉炭の炎のどかに寝正月	大阪市	本村 文福	ほぼばった雪にも死の灰生きて	茨城県	飯野	仙台子
増築で孫のわるさが遠ざかり	河内長野市	森本黒天子	後妻など欲しくはないと淋しそう		松井	十三吉
車窓も見ずたコンバクト若い娘よ	奈良県	木村よしを	塵払ううちの空の軸読めず	鈴鹿市	吉田	俊和
パチンコの土産に倦きた迎えよう	貝塚市	辰己忠太郎	友情に甘えたくない男気の	松江市	岡崎	祥月
やけ酒を飲むなと女将売り惜しみ	香川県	三井 酔夢	残り福に逃げられそうな顔ばかり	堺市	武田	軍治郎
ブレイキがこわれて出世に遠い人	大阪市	松谷 政俊	中腰で師走の風邪に服む薬	京都市	大久保	和二郎
養老院まだ口紅を買うという	笠岡市	松本 忠三	珍客に珍軸見せる新春の部屋	布施市	仲野	とん智
除夜の鐘頭の掃除してくれる	石川県	高山 清勝	結論を急いで決める仲でなし	大阪府	橋本	裕邦
結び帯アクセサリーのバックシメン	豊原市	三上 美路	内睜に指はすなおに動くなり	松江市	岡崎	雪美
家計簿がふとんの下にある不運	大阪市	西本 保夫	自家用車あるのと日曜約束し	大阪市	豊島	艶子

体力に

総合ビタミン剤

強力

パンピタン

「タケダ」

30錠・100錠

ほかにミネラル入

強力パンピタンM

に苦しいに達しない。

然し作家である以上、ある程度の試練には耐えて行かぬ事には時代に取り残される事になる。

自分のための趣味だと云ってしまえないところに、むつかしい苦しみがあるのだが、一句を誌上に発表する以上、其処に読者があると思わぬ訳には行かない。

読者を意識する作句のへい害はすでに云いつくされた感があるものの、読者をして、ウンと云わせる素敵な共感、何処からとなく作者にはね返って来る。一種の電波は正直である。作家の喜びはこれである。

何事によらず時代と共に工夫と努力を重ねたい。お互い若い者の世界だなんていついていられない。生存競争は激しいのである。



笑みたところで顔なまつせと吾水・初胡の二人

川柳夫婦善哉 (3)

訪問者

丸尾潮花

——ご主人と一しよですか。

初胡「いいえ一人ですが。そやけど女のお友達も行きはりまっさかい。馬に乗ったり阿蘇に登ったり元気がおましたがホンにもうあきまへんワ。いまの若い女性は何ん社会へ進出していきはりまっさかい句材も豊富でうらやましいと思います」

吾水「夫婦でやっていることがブラスかマイナスか、ということを考えますが、けっきょくマイナスだな」

初胡「作句してみてもらうと、こんなのアカン、これもアカンと言わねるので句は見せんことにしてまわね」

このご夫婦も、こと川柳となる

と妥協はしない。
初胡「千代子さんと露村女さんと私が、いざよい会の創立者ですが、二年ほど前に若い方にパトンをわたしたところ、どういものか会がさびれて又々乗り出すことになりましてん」

ここにも二番手の悩みはあるようである。

吾水「雑談で

は吾水より初

胡のほうがう

まいなんて言

われアホらし

ゆうてネ。も

ちろん女性と

は句の素材も

ちがうし、そ

れに女房は川

柳というもの

の予備知識を

もたずに、そ

のものズバリ

作句していくので、他人からみる

と目新らしく感じるのでつしやろ

ナ。女は女だけの、男の知らない

世界がある。それを素直に実感に

盛って句にしてい、

初胡「私の句に、

エプロンで行ける桜を見

損い

と、いうのがありますが、すぐ

近くの造幣局の桜さえ見ぞこなう

こともおます」

多忙な妻の座から、これはご主

人への小さな抗議であろうか。

吾水「妻をモデルにした私の句で

すが、

エプロンを持って悔みに

行く女

これは実感です。それと私自身

を詠んだ句に、

ノイローゼきようの仏と

同一年

やはり歳ですなエ、ちよっとさ

びしくなる」

初胡「川柳の句はすつきりしてま

大阪一名古屋 2時間27分
ノンストップ

近鉄特急

大阪上本町発	7.00	8.00	9.00
	11.00	13.00	15.00
	17.00	18.00	20.00
近鉄名古屋発	7.25	8.25	9.25
	11.25	13.25	15.25
	17.25	18.25	20.00

ほかに 大阪・名古屋 準特急
伊勢を結ぶ

特急券・準特急券 (座席指定)
お求めは 各乗車の5日前から

近畿日本鉄道

吾水と初胡

ペンとカメラのおしどり作家訪
問記も、重ねて早くも第三回であ
る。

本号のビントを合わせた場所、
そこは、——天神橋は長いな、落
ちたらこわい——という、むかし
の童謡にあるその名橋天神橋を渡
ると、太いかな文字で「ぶつた
ん」という看板が目につく。ここ
が深野吾水(番傘同人) 初胡夫妻
のお住まいである。

番傘いざよい会の創立者であ
り、柳歴も昭和四年ごろからとい
うから相当古い。ご養子夫妻に孫
三人という恵まれたご家庭でもあ
る。

ご商売柄というわけでもあるま
い、吾水さんは町会のお経の導

象は上々である。

テープレコーダーの準備OK

吾水「ではポチポチ始めとくれや
す」

と、こう構えられては先方さん
の仕切り充分というところだ。こ
いつはメッタなこと書けな
ぞ、とはこちらの思い過ぎ、そ
こは苦勞人のご夫妻である、どん
な質問にも軽い大阪弁でハキハキ
答えてくださる。

初胡「私が川柳をやり出したのは
港区にいたときですから昭和七・
八年ごろでっしやろか」

吾水「その頃、夫婦で川柳してい
る人はすくのおましてな」

初胡「いまはいざよい会だけは毎
月出てますけど歳をとるとあきま
へん。若い時は松江や福岡まで
足をのばしたもんです」

と、こう構えられては先方さん
の仕切り充分というところだ。こ
いつはメッタなこと書けな
ぞ、とはこちらの思い過ぎ、そ
こは苦勞人のご夫妻である、どん
な質問にも軽い大阪弁でハキハキ
答えてくださる。

度、初手から川柳をやり直してはしいもんです。矢尾板が世界選手権の夢ならず敗れたとき、やり直すと言った、もう一度出直すということは誰でも言うがやり直すとはエライことを言うたとつくづく感心しましたよ

吾水「心んの川柳への情熱は奔流のように激しいものがある。プロ・ボクシング世界フライ級第一位、同級東洋チャンピオン矢尾板真雄選手まで飛び出すすさまじさだ。

吾水「ねずみという題でハンカチのねずみ炬燵の上ではね

というのを抜きましたが、ハンカチのねずみとはおもしろいし、私もよくハンカチでねずみをこしらえたことを思い出して、巧い、と思ったのです。ところがどうです、これが初胡の句でんね、字もちがうしわからしまへんがな」
初胡「吾水の選にはわざと書体を変えときまんねん、抜けて八百長やおもわれたらクッタツンわるおまっしやろが、ホンでへたな字を書いときまんねん」

こうした徹苦笑ものは、どのおしどり作家を訪ねても同じことであらう、さきの生々庵ご夫妻の場合もそうであったように。

吾水「実感の句というてもあまり身近すぎると作れんもんですな、私は以前市電に乗っていました、が、どうしても電車の句ができません、これは他人さんが作ったのですが

自動車は電車の中で行き

たがりこの句を見たとき感心しました

な、よく自動車がレールの上を行くのです、交叉点近くになると速度が落ちて前に行く自動車がじゃまになって電車が走れんことがおます、運転しながらその腹立を句にしようとするのが句になりまへん、自分の職業となるとういうものか作れんもんでん

身近の職業を句の軌道に乗せることの難かしさを嘆く吾水さんでは、そういふものかも知れない、ここいらで話題を乗り換えて

——とこで吾水さんはお幾才でしようか。

吾水「なんぼになりますかいな、えーと明治31年生れやから六十三でっか」

——奥さんは？

初胡「わたしでっか、いくつにしときまひよ」

ここで吾水さんが奥さんのためにアドバイスするように、

吾水「ほんまのとき、家内のほうが一つ上でんね。昔は一つ上の嫁はんはえええというたもんでん、私もそれをほんとにしてみろたん

ですが、今は後悔してまんねん。そりゃなア若い時分は一つぐらい上でもわからしまへんが今となると、それを思うと残念でたまりまへん」

さすがに落語にも造詣深い吾水さんだ、そのはなしっぷりも真打ちというところだ。その笑いの渦の中でさらに話がつづく。

吾水「せよって、若い人が一しよ

にならはるとき、まちごうても年上の嫁はんはもらわんときなはれとやうであげまんねん」

初胡「私もそないおもてまんねん、かりに叱かれても年下の婿はんやおもうとアホらしゅうて」

近ごろ流行の姉友房は、このお二人には反対らしい、お二人の仲はなかなかどうしてお睦じいかざり、こちらはのつけからアテられどうしである。

吾水「叱かれるといえはこっちにも材料がおます。きょうは川雑から潮花はんがお見えになるので早よ起きました、いつもはお昼ごろまで寝てまんねん。」

段取りの狂う早起き叱られる

というのがあります。あんまり早く起きると朝食の段取りが狂うそうです。

眼鏡探すたび妻から叱られる

と、これもよく眼鏡をおき忘れては叱かれてる句です。せよってつまりこっちは叱かれようという事になってます」

初胡「そうは言わしまへんぜ、あなたの句にもこんなのがおます。パンばかり食わすと妻を叱りつけ

どうだす」

吾水「それは戦時中の句や」しばしは「叱かれ問答」もあって、川柳夫婦の川柳夫婦たるゆえんを遺憾なく発散させる。

吾水「これは娘に養子したときの祝吟ですが、二人連れ天神橋が短かすぎ

いまのご夫婦のうちで、どちらか片方だけ川柳をしていられるとこがあります、この際ウチのように夫婦でやってほしいと思いますな、楽しいもんでっせ、なんや蝶々と雄二みないなげど。世の中のご夫婦が円満であるように川柳で結んでいてほしいものです」と、やはりプラスするところありか、川柳夫婦が一組でもふえることをねがう深野吾水、初胡ご夫妻である。

雑稿

今西生畫

カメラと川柳

カメラ・村山光輪

曾て井泉水の俳句観賞の一文中に「俳句は事象の横断面である」と云う名言があった事を思い出す。誠に簡潔であるが要を得た言葉と思つたので私は私なりにこれをレフレックスカメラに当てはめることが解りよいと考えている。先ずミラーに写したい全景をとらえ、光・絞り・シャッターを定め次に技巧としてフ

イルターやアングル引伸に於ける焼込み等川柳や俳句の技巧と何等変りはない。然しここで最も大切なことは全景を生かす為の焦点の選び方で、焦点即ち井泉水の云う横断面の選び方によってその作が決定づけられる。選び方がよければ全体を生かし悪ければ全体を殺す結果となるからである。カメラがレフに愛着を感じるのもこのミラー（川柳では心鏡に当る）があるからであらう。

処で面白いのは写真では風景等の俳句調のものよりもユーモアや皮肉な川柳調のものが喜ばれているに拘らず、短詩文学ではなぜ川柳が俳句に牛じられているのだろうか、川柳子の考えなければならぬ問題がありそう。

工業技術院長賞受賞



軽やかな書味 楽しいお仕事！
適した硬度をお選び下さい。
HOP 学生事務製



ホノリ
筆



前田雀郎先生を 憶う

阿部佐保蘭

米の木を植物園で教えられ

これは雀郎先生が都柳壇（今の東京新聞その当時の都新聞柳壇）の点者だった頃今から三十二年前僕が投句して最初に発表された句である。これが縁で代々木初台の先生の自宅を訪れ、くぐって入る本格的なお茶室に案内され川柳の話を承ったのが初対面である。その後都川柳会が出来、誘われてその同人の一人となった。その頃は向島に居られ柳談に共に一夜を明かした事もあった。食通の先生に料理通の奥様の手料理で盃を交し俳諧の話川柳の話に時の経つのを忘れ、母から向島を忌門とされたことも今は懐しい思い出となった。都川柳会が解散され、先生の推薦で川柳きやりの同人となつてからも、先生を中心とする川柳の席に招かれ前句附の話、俳諧の連句の研究にうきみやつしたものである。先生の案になる初代川柳の雅印を集めた川柳趣味浴

衣を松坂屋の凶案部長に描いて貰い、その当時十円の型代を出して反一円八十銭で細地の真岡地で売出し好評を博した事もあった。この浴衣は宮尾しげを画伯の初代川柳の画像を茶掛にする時表装に使って今でも私の手元にある。昭和八年静岡の川柳大会を振出しに三週間の川柳の旅に出た時、私は初めて背広を着て、白の平呂のネクタイに先生の句

鯛の夢より抜けて朝の風

雀郎

の句を銀で、雅号を金で模様師に描いて貰いそのネクタイをつけて、当時大阪でキングと云う喫茶店を経営しながら、川柳をやつて居られた麻生路郎先生を訪問した。これが思えば路郎先生霞乃女史に拝顔の栄を賜わつた最初であった。それからずっと先生に私淑して廿七年になる。話は元へ戻つてきやりの二十周年紀元二千六百年記念に

私の案で川柳レコードを松竹レコード盤で出した。その中に雀郎先生にも吹込んで戴いた。この盤は強制疎開の節紛失したが、湯田中の中島紫知郎雅兄の処に私の贈呈したものが、確か残っていると思う。いつか機会を得たら、湯田中を訪れ旧交を温め、そのレコードを聴かせて貰い今から二十年前の若き日の雀郎先生の声に改めて接したいものと考えている。と同時に路郎先生御夫妻の昨夏泊られた庵も見せて貰いたいものと今から楽しみにしている。堀口九万一邸で堀口大学、佐藤春夫氏等と川柳久我山の夕を催し共に句作、揮毫、柳談に花を咲かしたことも今は懐しい思い出となった。大東亜戦争で先生も疎開され、僕も柳界へ御無沙汰勝ちで終戦になつても同様で三十九年前村田周魚先生の句碑除幕式の節上野公園内東照宮社務所でお目にかかったのが最後となつて了つた。一昨年新宿区下落合に

住まわれてから移転の知らせを賜わり一度お伺いしようと思いつつそれを果さず、先月二十八日新聞で先生の死を知りその告別式に列して心からその靈に詫び御冥福を祈つた次第である。伊東深水が葬儀委員長で日本放送協会を初め長谷川伸その他著名の士の花輪に囲まれ、霊前に飾られた写真は在りし日の先生の温顔を伝えて余りあるものがあつた。東京柳壇の諸先輩は勿論横浜、栃木、大阪からも諸先生の顔が見え葬儀は悲しみの中にもさすが東京柳壇の一方の旗頭として恥かしからぬ壯観を極める中にも和やかな雰囲気をかもし出した。先生はその雅印の中に雅号の雀郎にもじつて雀百迄踊り忘れぬ気持から「百まで」と云う雅印を作らせ短冊色紙半折等に揮毫の際用いておられた。

私の書いて戴いた色紙半折の中にもその「百まで」の雅印が押しであり、案外に若くして逝かれた先生、これからもっとも川柳の為活躍して戴かねばならぬ先生を憶う迂生の思ひは追憶の句と化して、拙き筆に思ひを込めて左の一句を短冊に認め先生（今は俳諧亭源阿川柳雀郎居士となられた）の御霊前に捧げた次第である。

百までの願ひ叶わぬ夜となりぬ

佐保蘭

（昭和五年二月九日二十七日の夜を詠む）



私はおもろ

直原七面山

四、五回出席してみんなとも顔なじみになった或る川柳会が忘年句会をやると言うので、酒は余り飲めないが賑やかな川柳の雰囲気を楽しもうと、連絡先になってい

る。僕への出席拒否は、果してY氏自身の独断によってのことである。それとも主宰者K氏からの強力な指示によるものであろうか。はたまた、二、三の幹部連中の策謀なのか、未だその謎は解けてはいないのだが、会への出席を熱望していた私が完全にその忘年句会からシャット・アウトされたことは、これはまきれもない事実なのである。

なんとこれ程人を馬鹿にした、そして悲しい出来ごとが柳人としてまたと此の世にあるであろうか。こうした卑劣な行為をして、敢て恥ずることなく、おいらは川柳の指導者なのだと思張っていたのでは、一般人などから「どうも川柳人は……」などと、痛くもない腹をさぐられ、後指をさされても、これでは詮ないことだなとつくづく思

つてもみたものである。私には主宰者に依頼されて句評を書いた。褒め讃える程の句もないので、悪評をした訳であるが、例えその評がシユン烈を極めたからと言って、句評は句評、忘年句会

は忘年句会といふ簡単に割り切っていたところにどうやら私の思い違いがあったらしい。句評を根にもって酒の力を借り喧嘩をふっかけるような川柳人など一人もない筈なのだが事実はそうでないらしく、川柳人の人格を自ら下落させているようなもので、これでは川柳は人格とうやの詩だなんて大きな声で言えた義理ではありません。どうも岡山県下の柳人の質の低さを自らばくろしているようで誠にお恥しい次第である。

不朽洞会員のシンボル

美しいバツジ

一冊二〇〇円
送料八円

〒525-0005 大阪府住吉区万代5-25
川柳社
(阪警口座大阪 75050客)

しかも私自身がその喧嘩を買って忘年句会を喧嘩句会に終らせる様に思われたことも残念ではあるが、これは日頃の私の言動がみんなに写るのであって、今更弁解してみても始まらぬ事ではあろうが喧嘩を吹っかけるかも知れないように思われた相手の方達にも私は私なりに同情をしている積りなのである。川柳がまこと人格とうやの詩であるためにはその原因がいづれに

★川柳 3月の会

<p>あるにせよ、お互にかんように構えて共々に和気あいあいと、川柳発展のために、語り論じ精進して行きたいものである。</p> <p>招かれざる客の一人もいないよう仲良く柳魂の練磨に……</p>	<p>所 題 時</p> <p>淀川句会 3日(木) 六時</p> <p>絵はがき・秘密・新品 十三西之町五丁目 東淀川郵便局</p>	<p>所 題 時</p> <p>宇部句会 6日(日) 一時</p> <p>発明・レコード・点数・調子 沖ノ山扇町区長事務所</p>	<p>所 題 時</p> <p>七周年記念句会 10日(木) 六時</p> <p>葎乃先生選「玉串」・造花・支店・部分品 市電玉造南百米大阪信用金庫</p>	<p>所 題 時</p> <p>富柳句会 12日(土) 六時半</p> <p>旅・貧乏・時計 富田林市役所日本間</p>	<p>所 題 時</p> <p>小松句会 12日(土) 七時</p> <p>人気・野心・悩み 日の出町 日の出湯二階</p>	<p>所 題 時</p> <p>米子句会 13日(日) 一時</p> <p>失礼・曲り角・好き 米子市公会堂日本間</p>	<p>所 題 時</p> <p>明和研究句会 13日(日) 一時</p> <p>咳・炎・山</p>	<p>所 題 時</p> <p>京都句会 16日(水) 夕</p> <p>童顔・疲れ・一ト時 四条繩手 仲源寺</p>	<p>所 題 時</p> <p>阿倍野句会 16日(水) 六時</p> <p>自信・煙・マフラー 旭町二丁目 金塚会館</p>	<p>所 題 時</p> <p>西宮句会 18日(金) 六時</p> <p>野心・少年・雲 阪神西宮駅北出口スグ 市立労働会館</p>	<p>所 題 時</p> <p>にしなり句会 20日(日) 六時</p> <p>貧乏・誘拐・たそがれ 西成区玉出町一ノ一 (南和園) 後藤梅志居</p>	<p>所 題 時</p> <p>堺句会 22日(火) 六時半</p> <p>先祖・やりくり・卒業 堺市九間町山ノ口 八木摩太郎居</p>	<p>所 題 時</p> <p>南海電鉄句会 24日(木) 六時</p> <p>ラッシュアワー・あかぬけ・せつかけ 難波高架下 親和クラブ</p>	<p>所 題 時</p> <p>浜寺句会 26日(土) 七時</p> <p>修行・電話帳・苦手 南海本線スワの森駅北一丁 諏訪森会館</p>	<p>所 題 時</p> <p>弓削句会 〆切月末</p> <p>男なら・旅行・恋人・奥さん 岡山県久米郡久米南町下弓削 四五四 直原七面山居</p>
--	---	---	--	--	--	---	---	---	---	---	--	--	---	--	---



入門講座

研究題「プラン」

清水白柳

今回からこの欄を、永らく続けて来られた戸田古方さんに代って、担当することになりましたが、講座の進め方やその他のことについて皆様からの忌憚のないご批判やご意見をどしどし聞かして頂き、よりよい講座にしてゆきたいと存じて居ります。
研究題「プラン」の最初に登山に関する句を四句取上げて見ました、

今回からこの欄を、永らく続けて来られた戸田古方さんに代って、担当することになりましたが、講座の進め方やその他のことについて皆様からの忌憚のないご批判やご意見をどしどし聞かして頂き、よりよい講座にしてゆきたいと存じて居ります。
研究題「プラン」の最初に登山に関する句を四句取上げて見ました、

普通だれでもが「父母」と父の方を先に置きますがこの句は「母と父」と逆に置かれてあるのが目につきました、そしてその母と父の差は、愛情の深さだけの差を言ったのではなくて、登山に対する理解とでも言えますか、母はそんな危ないことは止めた方がよいということに対して父は世間的な視野から、理解してくれるという差を匂にしたもので、表現にも難くない作品といえます。
弱い子のプランで過すお正月
下五の「お正月」が動くように思われます、これを夏休みとして見ましても、矢張り句になります「過す」という一家団らんのが、夏休みですとこの「過す」は海浜の涼しい所か、山の静かな所で過すということになります、どちらにしても動かない下五を考えたいと思う句であります。
二三年おんなじプラン建てただけ
このプランはそうたいして大きなプランではなくて、旅行か或は電化器具の買入れ位のように感じられますのは、「おんなじ」というところにあるようです、そしてプランを立てた「だけ」と投げやりな作り方にせよ、具体的に表現を考えられますと面白く思っています、プランを建てるは立てるではないでしょうか、若し家を建てるようなプランです

と、「おんなじ」では軽いと思われます。
計画がえびすの船のよう
えびすの船という比喻は今宮のえびすさんの十日戎に売っている、赤と白とのねじれた船を知っている人にはよく判ると思えますが適切な比喻とは言えないようです、そして「曲り」が、船がぐにやぐにやに曲ったと解釈するとプランが台なしになったことになり、句としては余り面白いとは言えませんがようねじれながらも進み、プランがねじれながらも進み行してゆく面白さが出るように思われます。
子供等のプランへ親はついでけず
よく穿っていると思えますが、欲を言えばこれが素材であって、そのプランが何かを具体的に、深く掘りさげて行きたいと考えられるのです、川柳としてこの句は今日迄の川柳でありまして、勿論これでもいいとは思って居りますが今後はそうした意味で「もう一歩深さ」と考えて居ります、これはこの句だけでなしにすべての句に言えることなのですが。
旅の雨湯槽でプラン練り直し
気の置けない同士で温泉に浸りながら、外の雨を眺めて、プランを練り直しているという淡しい情景を詠んで成功していますが、どこか甘さを感じます、それは「旅

の雨」という安易な字句がそう感じさせるのではないかと思います、動かすことは出来ないようです。
城崎でプランを替える雪となり
前の句と同じように温泉でプランを替えることを詠んで居りますがこの句からはしっかりしたものを感じます。山陰の雪は一夜のうち三十センチ以上も積ることは稀ではありません、雪が積ったので前日迄不可能であった、スキー場も、スキー可能となると迂りたくなるのが人情です、まして暇があつてお金があつて温泉に来て居るのですからね、この句の「城崎」も「雪」も動かない佳い句だ

高血圧
浮腫・妊娠中毒に
クロトライドの10~12倍強力な
ダイクロトライド

と思います。

手術順調新たなプラン湧いて来る 一編

病院生活の実感をよくとらえて句にまとめられて居りますが、下五が「湧いて来る」でありますから、プランでなくて希望の方がよいのではないかと思います、プランならば立てるといふ方が適切な表現になってくると思われ、集句のところにこの句の弱さがあるように感じられます。

プランだけ立てて責任果しとき 保夫

何時の汽車に乗って何所へは何時に着いて旅館はどこでプランを立てるだけが責任だったのではその責任だけを果したというのか、言い出し乍らさて実行となると身体都合がつかなくなるとプランを立てただけですましたとすると「責任果たしとき」が、ふに落ちないような気がしますが、色々に解釈できるといふことがこの句の欠点で、作者にはよく判っているが読者には判らないとすると、独り合点ということになり、具体的なものも句に現われていないので、あいまいな句になってしまふということがあります、身近かなだれかに読んでもらおうということも、この欠点をなくする一つの方法ですから、そうしたこともお互に実行したいものです。

連休のプランを組んで金 美舟

この句にもややあいまいな点があります、それは下五の「金はなし」であり、連休のプランを組んだ時には金はあったが、実行する段になると使ってしまったて金が無くなったといふのか、又は最初から金はないけれども、プランを組んで楽しんでいるのか、どちらにでも取れそうなる「金はなし」という表現になって居りますが私は後の方のプランを楽しむだけの句として考えたいと思ひます、集句の中に金を使つてしまつたとか、自腹を切つたとか色々の句がありましたが、連休を持って来た着想と、「金はなし」と突き放すような表現が、この句を救つて欲しいと思ひたいのです。

し」であります、連休のプランを組んだ時には金はあったが、実行する段になると使ってしまったて金が無くなったといふのか、又は最初から金はないけれども、プランを組んで楽しんでいるのか、どちらにでも取れそうなる「金はなし」という表現になって居りますが私は後の方のプランを楽しむだけの句として考えたいと思ひます、集句の中に金を使つてしまつたとか、自腹を切つたとか色々の句がありましたが、連休を持って来た着想と、「金はなし」と突き放すような表現が、この句を救つて欲しいと思ひたいのです。

プラン通り行つていませよ 堅持

少々は思惑がはずれても夫の手前で強気の弁をはく妻の意地を詠んでいと解釈しましたが、意地だけでなく妻の信念というものを「強気」という語で誇張したとしても面白いと思ひます、慾を言えはどのプランかが判るように表現されていると満点なのですが、十七音字の短詩型では無理ですね。

プラン口にするへそくり 舟遊

「口にする」という語でこの句は成功していますが川柳家は省畧ということに馴れてしまつてこの句の「プラン・口にする」とプランと口にするとの間に接続語を入れないうで第三者川柳家以外の人々が、これを愛に感じないかと思ふのです、プランを口にするとしても、この程度の字余りは何

等差支えないと思われ、かえつてなだらかさを感じさせるようです、字数にこだわらないようにしたいと思ひます。

命名の時から東大出すプラン 生薑

いい着想の句であると思ひます、恵まれた家庭でなくても、この子一人位は東大へ入れてやろうと思ふ親心をよく描いて居りませぬをいへば、「東大出す」とごつごつした表現になつて居ることです、これを「東大やる」とでもすればいくらか、よくなるように感じます、この句も接続語を入れて字余りになりませんが、殊更ら字余りにするのではないことを申添えたいと思ひます。

授かりものと無計画に産む子沢山 一編

「子沢山」という語を据えたために十二字も使って説明しているような句になつてしまひました、「無計画」という語に作者は批判性を持たせて、句を生かすつもりであつたかも知れませんが、子沢山そのものに作者の考えが居られる批判性があるのですから、そこから句想を發展させて、焦点をしばらくつ川柳を生み出すことに努力してはしいと思ひます。余韻も余情も感じられないものは句として成功したものとは言えないと思ひます。

子のプランババ飲み過ぎ 敏子

で動かれず

いい所を掴んでいますし、表現にも難はありませんが、余りにも

そこらに転がりすぎた素材を句にしたからですから深さを感じるものが出来ません、こうした境地からもう一步深く見つめて句にまとめられるように心掛けたものと思ひます。

実行に移すとなくな 徹也

経費とか日数とかで、帯に短かしたすきに長しの諺の通りで「手頃であつて丁度いいものが」ないといふことの「」の中を省略されて居るわけですが、それだけに終つてしまつたということになるとこの句も通り一ペンの句で底の浅いものだと云えるやうです。

プラン当り徹夜続きの眼に涙 八九寸

計画から実行までの責任を負つていてそのプランが当つて徹夜までしたその嬉しさの嬉し涙という意味に解しましたが、「眼に涙」という常套的な語を据えたために、徹夜しての疲れた為の涙とも解釈されそうなる点に、この句の弱さがあるのではないかと考えられます。

割勘のプランへ一人もう居らず 敏子

「もう居らず」という措辞は佳いと思ひましたが、割勘の「プラン」を「つもり」にすると句の中が広くなるといふますか、句の持味が大分面白くなるやうですが、題がプランなので題から遠くなるやうにも感じます、これは非常にデリケートな問題を含んでいますので段々と研究して行きたいと思ひます。

います。

プラン聞いてその裕福に腹が立ち 徹也

作者がそのプランを羨し居るに、「腹が立ち」と表現して居ますが、これは本当に腹が立つたのではなくて、やきもちに似た感情をふくめてのことであると受取るのが出来ません。併し事実を有のままに書いて居るといふことも言えるのではないのでしょうか、ここから出発して文学的修練を経て本当の川柳にする苦しさを味わつてはしいと思ひます。

プラン決行僕のグループ雨になる 静水

一寸飛躍した表現で句意に誤解され易い点がありますが、非常に素直な読み方で着想も面白く叙情的な点が佳いと思ひました。そして適度のウィットもありますので成功していると言へます。

次回研究題「荷物」

切 三月十五日

表 五月号

宛先 大阪市天王寺区上之宮町

一六 清水白柳

すばらしい 着心地

蝶 矢 シーツ

CHOYA SHIRT CO. LTD.

絵と川柳で表現する歴史 (第三回)

戸田古方

⑤ ローマの世界

左上の力士のような人物から見てゆきましょう。アレキサンダー大王の遠征のところに出了たギリシア文化をあらわす頭の大きい子供に比べますと、ローマの文化は頭のわりに、胴や手足の発達した文化であることがわかります。ギリシア文化のあとをうけて、これをのばせるだけのばして、ひろい領土に高い文化をひろめていったのでした。そして今日の文化にも深いつながりをもっています。

ローマはイタリア半島のローマ市を中心大きくなつてゆきました。

七丘のまん中にまず一里塚
ローマもギリシアも全く地形の關係に左右されることが大きいのですが、絵の中の円でかこまれた範囲が最初に統一されました。イタリア半島の向う岸のアフリカには、海上に強い勢力をもつカルタゴという国がありました。この国を亡ぼしてからローマは地中海を自分の海にすることが出来まし

た。ポエニ戦争といわれるこの戦

はローマにとって貴い試金石でありましたが、カルタゴ側にも有名な英雄ハンニバルが現われ、金持喧嘩せずと、彼の愛国に協力しようとしなかつた指導者たちにそっぽをむかれながら、ほとんど独力でローマと戦つたのでした。

ハンニバル勝手に勝つてくるときめ

それからのローマは饒のほりです。まん中の人物はローマの支配者であります。統一のために武力がつかわれたことはいうまでもありませんが、土木と法律を上手に役立たせたのでした。「すべての道はローマに通ず」といわれる軍用道路が国内のすみずみにまで伸びひろがり、アーチをつかつた建築は、ギリシアとくらべものにならないほど大規模なものをつくれるようになりました。法律もギリシア時代でありましたが、ローマ時代に出来たものはよくできていまして後にローマ法大全と整理保存され、今日世界各国の法律のもとになっています。ギリシアと同じくローマも民主主義を立前にする国柄ですが、いろいろの意見をもった人人がいましてので、栄

えれば栄えるほど繁栄と貧富の争がくりかえされるのです。
あッシーザがのめります



ヴィアヌスが第一代の皇帝に推されるのです。しかしこれからはらくはローマにとって最善の日がつつき、理想の帝王の下にローマは神入の菓子折のような秩序の下に、最大の領土をもつことになりました。背景の不完全な地中海をかこむ地図はこの領域を示しています。

と独裁者は倒されましたが、その後、形式的にはローマ帝政時代に入ります。シーザーの甥のオクタ

領土がひろがれば異邦人も入って来ます。その異邦人キリストがキリスト教を開くのです。

主をうった銀三十枚で何買わん
ローマ文化はギリシア以来のヘレニズムでおしすすめられて来ました。キリスト教は東方文化、ヘブライズムの流に咲いたものです。キリストの受難も、帝政時代のキリスト教を信じたローマ市民の殉教も、この文化系統のちがいが生れた運命でもあったのでしよう。

コロセウム 屍臭をけすに 善徴をまき

そのキリスト教も利用した方が得たとわかると国教となつて全領土にひろがり西洋文明のバックボーンになつて行くのです。

そしてふくれ切つたローマは、外からゲルマンの侵入があつて遂につきくずされてしまいましたが、実は自らの手で亡んでいったと見る方が自然なのであります。

ギリシアとローマは通常クラシク即ち古典時代といわれまして、次に出てくる中世千年のうち、その前年の五百年間はしばらく表面から姿を消します。しかし十世紀以後の十字軍等による刺激に逢うと再び活動をはじめ、十四・五世紀のルネサンス文芸復興をへて、近代文化へ突進してゆきますが、その「復興」というのはこのギリシア、ローマの文化の復活とをさしているのです。

こういう風に世界史の上ではこれに意味をもつローマについて今回は少しくわしくかいてみました。



句の花がきれいに咲いた会場の一部

川雑女流作家の集い

— 新春川柳句会 —

会場 中島小児科診療院階上

品の件、会員の住所録作成の件を附加されました。葎乃先生は今日のは作句にふれず、主として会員の親睦に就いて語られました。年一、二回顔を合わすだけの友の会でありますから、間は文通をして欲しい。筆不精の人は、時候の挨拶というような面倒くさい前奏曲はやめにして、直ちに本文を十七字にまとめて、鉛筆でよいから一行だけの便りでもして貰いたい。私どもの横の交流を促されました。

大阪には珍らしい小雪ちらつく一月二十四日、窓外の場の羽搏きを聞きながら新春句会を開きました。ここ鰻谷の中島小児科診療院階上の一室は、都心と思えない程静かな雰囲気、柳味豊かな会となりました。今年は男性のゲストもなく、寄生木や接木でない独立歩の婦人の会として出発しました。清子さんの開会の辞から始まり、小石さんの御挨拶に次いで、阿茶理事長は友の会に対する希望を述べ、今年の短詩連盟作品展に出

展を述べ、今年の短詩連盟作品展に出

席題、兼題の披講は、清子さんの諧謔な司会で、和やかに終了。漸て、スクリーンはお待ち兼ねの懇親宴に変わりましたが、篠山の小西富士子さんや新会員の大聖寺支部の長谷川美代さんの欠席は残念でした。茶碗むしと暮の内を膝元へ置いて、飲む事、食う事、喋る事

露払いに、阿茶さんが三筋の糸あざやかに、「初詣で」「初笑」を唄われました。一米さんの立山節、

清子さんの都々逸、小石さんの「まゆ玉」と「山姥」の踊、葎乃さんの「花笠音頭」梨花さんの御祝儀舞「鶴の声」孝江さんの黒田節、葎乃先生と良子さんの相舞「大津絵」、今日初めて出席の女のさんは口三味線で「梅は咲いたか」知恵さんは「ソーラン節」の踊り、と爪弾きで明治の「大津絵」を唄われ、余興部長の花奈女さんは自作振つけの踊り数数、バラエティーに富んだ妙技には一同拍手喝采、そろそろ帰仕度となつてからも花奈女さんの民謡道中で、ノーストップで出るフォークソングで一同手を叩くより外に芸がありませんでした。これが最後の手打ちの代りとなつて、一同句の精進を誓い合い、友の会黄金の年を期待して散会しました。

★ (藤村梨花記)

柳界の異色

川雑王国の異色というより、ひ

ろく柳界に異彩を放つわが川雑婦人友の会新春句会が、南区三休橋の中島生々庵医博のしようしゃな階上で催されました。

待ちに待ったこの日、風のない日曜日でした。どういふものか私が美容院へ行く日はいつも風があるのです。だからせっかくなのセツトも台なしになるので、

「無情の風」とはこんなときに使う言葉だと思っています。ちょっとのおしゃれでも作句の時間をうばわれますとこに女の損な面もあるようです。

それなのに会場へ向う途中、憎くや粉雪が昨今の大阪には珍らしく降ってきたため、あわててお高祖頭巾よろしくスカーフでせっかのおつむを守るのでした。

兼・席題の披講に先き立て、わが川柳の母、葎乃先生より慈愛あふれる柳話があり、これは男性の方にも聞いていただきたかった会員親睦の十七字交友通信でした。

おなじみのお顔、新らしくお見えになった方が、柳道によって結ばれたこの案

しい会が、日に月に伸びていくことはな

んとしてもうれいこととごさいます。

太田良子姉妹「大阪弁」では思いがけなく天位を得ましたことは望外のよろこびでした。

披講がおわって懇親宴ともなれば、そこは芸達者ぞろいの友の会、唄あり踊りあり、いずれおとらぬ名手ばかりとあって正にけんらん、実に華麗そのものでした。

窓外には六角の花が舞うごとく降り、夜目にもほのかに白色が美しい。

夜の南は初めてといわれる新入会のしの女さんと、ほろ酔い機嫌の私が街へ出たのは八時ごろでした。

橋筋に行く私の胸に去来するものは、いまなお療養中の友の会の皆様が一日も早くこの集いに出席くださることを祈りつつ家路へいそぐのでした。(久米奈良子)

— 句は次ページに発表

草の千足野
料理教室

会員募集

大阪クッキング スタジオ

堺筋本町二丁目南50米西側
ユニオン洋装店階上 TEL(25)4943

兼題「すし」

五目すしそろばん弾いてないうまさ
麻生 葎乃 選
衣食住足りてみくじへ縁遠く

阿茶 良子

黙ってる通へすし屋は気を使い
阿茶 若菜

すしめしのだれにもさせぬ水加減
梨花 藤村 梨花 選

若菜

巻すしへうすば切れ味ためされる
兼題「夢」

中島 小石 選
今この夢つづきが見たい朝寝する
一栄 阿茶

悪い夢みな振り捨てた空の青
一栄 阿茶

夢にさえ疎遠な人になっていた
兼題「大阪弁」

かなしさは夢の中でも気をつかい
花代子 西出 一栄 選

兼題「大阪弁」

且んはんお近いうちにと甘えられ
太田 良子 選
わに皮のハンドバッグは別の顔

一栄 孝江

小ぼんちゃん大阪弁で負けていす
若菜 順番を待つハンドバッグのいらつ音

若菜 春栄

お家はんという貫祿の大阪弁
奈良子 大公望ハンドバッグのお古持ち

奈良子

まかしときと引受けて来て叱られる
兼題「おみくじ」

おみくじは吉お蒿かなしい別れの日
山川 阿茶 選
山川 阿茶 選

川維婦人友の会連絡事務所

大阪市南区二ツ井戸町二三

山川 阿茶 選

山川 阿茶

川柳不朽洞会 (三月)

指導 麻生 路郎

賛助 長谷川 一徹

中田 守雄

白川 朋吉

中村 祐吉

田中 辰二

岩崎 愛二

中村 直勝

麻生 磯次

井上 吉次郎

島浦 精二

恒藤 恭

洞友 田村 孝之介

山本 雨迷

山路 閑古

柴谷 幸二郎

麻生 葎乃

橋本 緑雨

高鷺 亜純

沢田 四郎作

東野 大八

速水 真珠洞

中島 紫痴郎

不朽洞会員

中島 生々庵

奥村 丹路

戸田 古方
西尾 古方
市場 没食子
土井 文蝶
若本 多久志
川村 好郎
三嶋 美笑
松江 梅里
正木 水客
黒川 紫香
丸尾 湖花
小西 無鬼
西 いわを
八木 摩太郎
武部 香林

寺井 鋭々
古川 麗花
前山 北海
三輪 晚翠
大坂 形水
井上 湧三
西垣 錦風
築山 快夢
市岡 曉舟
白砂 旋風
藤本 満年
須崎 豆秋
羽佐 間柳
尾崎 方正
吉田 圭开
国弘 半休
長野 井蛙
友淵 貴山
太田 良子

直原 七面山
西森 花村
河村 日満
足立 春雄
榎南 夏六
石川 侃流
安岡 珊枝
河野 瑞哲
木村 千容
田村 方大
野村 味平
木村 堂平
福田 丁路
真野 白瓢
佐藤 梅志
後藤 白志
平尾 太希
木口 賀峰
小西 雄々
吾郷 玲人
菊田 いさむ
山川 阿茶
岩崎 一文
金山 秋郎
伊谷 光郎

服部 十九平
大森 娘旬
長谷川 三司
若林 草右
有働 葉春
大西 八歩
石曾 根民
北川 春葉
石井 白面
布川 筑川
桜田 久米
濱田 久米
菊沢 小松
逸見 灯柳
清水 恒明
小川 恒明

徳永 雅也
新川 緑之助
尼谷 竹莊
木津 柳慶
弘谷 湖山
杉田 耕民
増野 占民
佐野 史占
小野 史占
大野 史占
山口 史占
山崎 史占
野村 史占
木村 史占
小野 史占
野村 史占
福田 史占
真野 史占
佐藤 史占
後藤 史占
平尾 史占
木口 史占
小西 史占
吾郷 史占
菊田 史占
山川 史占
岩崎 史占
金山 史占
伊谷 史占

那谷 史占
伊谷 史占
金山 史占
岩崎 史占
山川 史占
菊田 史占
吾郷 史占
小西 史占
木口 史占
平尾 史占
後藤 史占
佐藤 史占
真野 史占
福田 史占
野村 史占
木村 史占
小野 史占
野村 史占
福田 史占
真野 史占
佐藤 史占
後藤 史占
平尾 史占
木口 史占
小西 史占
吾郷 史占
菊田 史占
山川 史占
岩崎 史占
金山 史占
伊谷 史占

那谷 史占
伊谷 史占
金山 史占
岩崎 史占
山川 史占
菊田 史占
吾郷 史占
小西 史占
木口 史占
平尾 史占
後藤 史占
佐藤 史占
真野 史占
福田 史占
野村 史占
木村 史占
小野 史占
野村 史占
福田 史占
真野 史占
佐藤 史占
後藤 史占
平尾 史占
木口 史占
小西 史占
吾郷 史占
菊田 史占
山川 史占
岩崎 史占
金山 史占
伊谷 史占

那谷 史占
伊谷 史占
金山 史占
岩崎 史占
山川 史占
菊田 史占
吾郷 史占
小西 史占
木口 史占
平尾 史占
後藤 史占
佐藤 史占
真野 史占
福田 史占
野村 史占
木村 史占
小野 史占
野村 史占
福田 史占
真野 史占
佐藤 史占
後藤 史占
平尾 史占
木口 史占
小西 史占
吾郷 史占
菊田 史占
山川 史占
岩崎 史占
金山 史占
伊谷 史占

那谷 史占
伊谷 史占
金山 史占
岩崎 史占
山川 史占
菊田 史占
吾郷 史占
小西 史占
木口 史占
平尾 史占
後藤 史占
佐藤 史占
真野 史占
福田 史占
野村 史占
木村 史占
小野 史占
野村 史占
福田 史占
真野 史占
佐藤 史占
後藤 史占
平尾 史占
木口 史占
小西 史占
吾郷 史占
菊田 史占
山川 史占
岩崎 史占
金山 史占
伊谷 史占



m.

一

路

集

夕食

戸田古方選

あれも食べこれも食べると親心 和子
 妻病んで夜なきうどんが待遠し 鎮海
 夕食は買って済ませと置手紙 暁明
 夕食も家風の一つ 嫁は真似 隆文
 お先に頂きましたと 倦怠期 一鶴
 徳利が夕餉のフキン持ち上げる 山椒坊
 夕食を片付けさせるよい 躰 みのる
 夕食の仕度に三時からかかり 蜻蛉
 倦怠期はまだ先らしい待っており 徹也
 夕食のカロリー妻は計算し 雄々
 ひっそりと夕食すませ老夫婦 梢月
 夕食へ新婚卵の日は続き 実男
 夕食へ主婦の情熱盛り上げる 敏子
 ウナ電で風呂と夕食用意させ 幽谷

会社から出た夕食を喰へ直し 木魚
 パチンコで晩の副食揚げた 儘 忠三
 夕食へ母を上座にすえておき 北海坊
 やれやれと夕餉眼鏡を拭いて待ち 光郎
 夕食の献立今日は娘に委かせ 藤波
 新妻の夕食月給でもつやろか 敏明
 夕食を抜いた明日のレントゲン 兼治郎
 夕食へママの行先書いた紙 保夫
 女の子もう夕食の用が足せ 鶴汀
 玄関に夕食すんだボスの顔 南牛史
 外孫も来て夕食のにぎやかさ 晃康
 夕食を少し待たす茶碗むし 淀月
 夕食の玉子を吸わずさし向い 舟遊
 勝った負けたで夕食をおごらされ 昌男
 夕食へラジオのように児がしゃべる 静太
 嫁さんが来て夕食がうまくなり 孝風
 昼からの雪に献立かえた夜 九呂平
 夕食に我家の幸のありったけ むじな

夕食が出る迄宿の子と遊び 一風

甲斐性は中どこババのいる夕餉 生薑

珍らしく妻が一本つけた宵 弘朗

夕食の膳で成人祝われるとん智

夕食がすめば善人寝てしま 昭

小商い夕食さえも落ち付かず ひか平

夕食の好物明日へ子は残し 雄声

食堂で夕食をする共稼ぎ 蘭

聞いた事見したこと夕食暇がいり 古心

益裁へ孫が夕食知らせに米 和三郎

夕食へみんなそろったうれい日 圭木

僕ひとり食べてなかった夕ご飯 雪峯

雑炊の夕食でもたのし 房子

夕食の次次割込む子沢山 たもつ

夕食へ一人足りないかくれんぼ 一休

五客

夕食をババとママとで楽しそう 卯之助

腕前をほめず夕食喰べるだけ 初甫

夕食をたべない理由考える えく呆

夕食の胃袋犬にひっぱられ 惠二朗

夕食がすめば猫まで散って行き 美舟

人

夕食へたばこは長いままで捨て 夢路

夕食は待たずに喰べる家憲にて

ムダ使い

杉谷湖山選

ムダ使い指摘する子に満足し えく呆

資金カンパへ無駄なような金 静水

コンバクト白赤塗って青も塗り 九呂平

ムダ使に見えた機密費物を言い 和楽

縁日で大人うなぎの針を買い 淀月

ムダ使のお宮の裏にたむろする 保夫

ムダ使い衝けば子供に弁があり 木魚

ムダ使いハンドバッグは開けたまま 梢月

ムダ使いするのと金を出してくれ 鶴汀

ムダ使いするのと貯金箱へ入れ 定月

ムダ使いさせず女の女房めき 舟遊

ムダ使いたしなめ合って共稼ぎ 卯之助

ムダ使いこれが外交だと云う身分 孝風

取引をもくろんで居るムダ使い 徹也

ムダ使い車券また買った捨て 惠二朗

ムダ使いさせぬ財布を妻がしめ 房子

ムダ使いではないつもり鏡を買い 一休

ムダ使いするのと膳繰り出してやり 万女

ムダ使いするのと余分な金ぐくれ 淡柿

ムダ使いするのと母より金がつき 昌男

ムダ使いなやとヘソクリさいてくれ 秀峰

ムダな寄附断りにくい義理があり 尚史

ムダ使いの癖が汚職へ手をのびし 光郎

白葩

血税を外遊として発つ羽田 進之助
 子には子の使ったわけがちゃんとあり 曉明
 ムダ使い俺はグラマン程じゃない 鎮海
 ムダ使い服のはころび気にもせず ひか平
 ムダ使い財布はみんな知っている 雄声
 ムダ使いするなと小遣い念押され 雪峰
 三代目お言葉どおり使いだし 裕邦
 ムダ使いしない誓いの無心状とん智
 ムダ使いでない一升さげて行き 雄々
 貧しさはムダ使いなど口にせず 繁太郎
 ムダ使いするなするなと為替が来 蘭
 ムダ使いあきらめ切れぬ不採用 代仕男
 レントゲン写真にムダもありと知り 淀月
 ムダ使いを「暮しの手帖」に叱られた 圭井堂
 ムダ使いせない娘で気に入られ どんたく
 ムダ使いするなと計算して持たせ 藤波
 ムダと云う言葉が妻になつてから 鎮海
 ムダ使い過去の暮しの癖が出る 周甫
 親の血が流れて居ますムダ使い 古心
 ライバルの手前チャップをムダに切り 弘朗
 ムダ使いで無くコネをつけて来た 一風
 妻に似て長男長女の無駄使 十九平
 ムダ使い叱ってくれる恋をもち 山椒坊
 佳
 ムダ使い止めたら貰うのかと聞かれ 実男
 ムダ使い叔母は除籍の手でおどし 九呂平
 そろばんへ夫のムダを置いて見せ 夢路
 ムダ使い許しませんと固い妻 夜潮
 苦にならぬものに二号のムダ使い 雄々

人
 ムダ使いするなと引導された金 敏子
 地
 ムダ使いするなとホームへ来ても云い むじな
 天
 ムダ使いするなと反古を伸す母 たもつ
 軸
 掘って埋めまた掘りかえされた廻り道
 火事
 木村水堂選
 建て直す勇気が火事に負けていず 豊年
 サイレンを見送り用心思い出し えく呆
 ビケ張った工場が火事で焼けまじい 生薑
 類焼をのがれた火事をよく喋べり 光郎
 焼跡に手のないバケツころがされ 卯之助
 原因を燃えて居る間に探り出し ひか平
 一本のマッチが起している悲劇 春雄
 ラジオで聞きましたと火事見舞 市郎
 火事火事といつになつたら不燃都市 旅風
 消防車北に我家は西にある 進之助
 火事見舞後ろの方は会釈だけ 夜潮
 よるの火事近くに見えて走らされ 北海坊
 急行を停めたホースの水が出ず 圭井堂
 原因のわからぬ火事の音が飛び 藤波
 交番へ夜なきうどんが火事を告げ 夢路
 折角の観劇半鐘で落ちつけず 川鳥
 消防の気抜けるほどのボヤでし 舟遊

肩書のある火事見舞まわつて来 庸佑
 この火事を金に見積る弥次の群れ 昌男
 火事跡をニュースカメラは非情なり むじな
 何よりも火事を恐れる齡になり 一風
 遠火事へベッドの患者胸をなで 慈雨
 火事出して故郷にも居れぬ仕儀となり 雄声
 遠い火事一服つけて見物し 隆文
 弥次馬の一人にされた火事見舞 敏子
 山焼けて松茸山の値が下り 定月
 類焼へ大阪人は負けとらさず 保夫
 火事見舞幼ない友情世に出され とん智
 金庫だけポツンと残った火事現場 美音子
 火事跡へ濡れた寝具を干す隣家 山椒坊
 我家だけ残った火事に他人の目 全信
 あわててる証拠一〇番へかけ 徹也
 建つ家のその数だけ火事が焼き さんたく
 火元に疑惑出ている保険額 木魚
 火事見舞火の粉で焼けて羽織 鶴汀
 ナフタリン臭い名刺で火事見舞 宗太郎
 火事見舞名刺を持って代理が来 古心
 火事見舞一級酒が届けられ 蘭
 火事出したことが苦になるひとごと 雪峰
 遠い火事とわかり御飯を喰べ直し 昭
 対岸の火事へゆつくりカメラ向け 十九平
 立退きを余儀なくされる火事さきわぎ 一鶴
 病院の火事を済まない気で撮す 八九寸
 火事はさの辺かと屋根の上へ聞き 愛鳩
 弥次馬のついでに済ます火事見舞 同
 路地の火事ホース二本がはいりかね 淀月
 犬猿の仲が直つた火事騒ぎ 同
 弥次馬が消防車より先に来る 雄々
 燃え上るのを待っている写真班 同
 真夜中の火事へあられもない姿 静水
 よう火事にならずに済んだ蒲団とく 同
 燃えてからお稻荷さんははつとかれ 尚史
 火の用心旅行先から電話する 同
 火の消えた空へふるえがまだ止まず 若菜
 親類の火事とも知らず見に出かり 幽谷
 対岸の火事はきれいなものに見え 恵二朗
 佳
 焼跡に親子で何かさがして居 たいお
 焼跡へまだあきらめぬ鎌をとり 井蛙
 山火事へ虫の命をふと思ひ 十九平
 サイレンへ子にどくと云い聞かせ 房子
 焼けあとの再出発へ他人の目 若菜
 物固い火元お詫びの草鞋履き 八九寸
 焼跡へ立退き先の札を立て 十九平
 火事出した悔が生涯つきまとい 和楽
 世の義理も欠いて築いた家が焼け 和三郎
 焼跡へ草の息吹きが春を告げ 一鶴
 人
 焼けてからここに出口があつたら 圭水
 地
 三十年火災保険をかけたつづけ 万女
 天
 火事遠くふとんのぬくみしみと 九柴
 軸
 義捐金出す倅せを語り合ひ



伍健の事ども

伍健君が二月十一日に亡くなった。日本柳壇をささえていた大きな支柱が一本ポキッと折れた感じだ。柳壇にとっては台風の被害にも等しい。台風被害なら復旧も出来るが、こればかりはどうすることも出来ない。

伍健君は敵のない人であった。

しかし骨のない八方美人ではなかった。趣味も豊かな人であった。画を描かせても一人前に描いた。私は伍健君の作品の幾らかを愛蔵している。その一つで、

河童かと思や人間かとかっぱ

のはその軸の飄逸さに至っては、絵を画く川柳家もかなりいるが、なかなか及びがたい作品である。毎年砥部焼の揮毫にかま元へ出掛けるのを楽しみとしていたようである。私もある女医さんからすめられ、もう少し時侯がよくなくなったら出かけるつもりでいた。その時には伍健君に連絡して楽しみを

共にするつもりでいたのに、その楽しみも半ば失われてしまった。

伊予鉄に勤務されているころ

に、会社の宣伝部らしい仕事を趣味的に引受けていられたが、踊も

なかなか巧かった。野球拳の創始

者で有名をせせたがそんなものを

創始するぐらいはお茶の子さいさ

いだったに違いない。画道一筋に

進めば日展の審査員には違うにな

っていたであらうし、踊一筋で行

けば日本舞踊家とし名をなした

のではないかと思っている。

剣を撫しては居合抜き五段、

何をさせても水準以上にやれねば

おさまらぬところを見れば非常に

凝り性でもあり、負けじ魂の持ち

主でもあったのであろう。川柳家

としては多作家であった。

私が、松山市へ出かけても、大

洲市へ行って、今治市へ出かけ

ても形に影が沿う如くに付ッきり

で面倒を見てもらったものだが、

その世話好きが、四国文化をどれ

ぐらい発展させたか周知の通りで

ある。

私の知る伍健君は稀に見る謙讓

家であった。曾て、私が玉出に住

んでいた頃に、来阪されたことが

ある。そして玉出駅の駅前に宿を

とったとの話。それが遠慮深さか

らの失敗だったが、とうとう、生

前その話を伍健君には発表しな

った。と、いうのはその宿は駅前

で一見堂々たる洋館ではあるが旅

人宿ではなく、芸者や女給の連れ

込み宿だったからである。その当

時、社の仕事をしてきた機見女が

パンションでの会食のお迎えに行

くの照れくさがったことを覚えて

いる。しかも、伍健君は会食を

遠慮して姿を見せなかったので主

賓のない会食に終った。それも遠

い昔の思い出となった。

(路郎)

柳界 展望

旬会

▼本社三月旬会は八日(火)午後六時から道頓堀文楽座別館で開催する。川柳作句に興味を持たれる方はどなたでも参加されたい。▼コクヨ川柳会(大阪市)旬会は二月二十四日午後五時半から黒田国光堂で開催。▼南海電鉄川柳旬会(大阪市)は二月二十五日午後六時から難波の親和クラブで開催。▼大阪通信病院川柳会は二月二十

七日午後二時から五階会議室で開催。以上路郎主幹出席。▼南区医師会杏林川柳会(大阪市)は二月二十三日午後八時から南区三休橋生々庵居で開催、路郎主幹病欠、葎乃女史代行。▼川維阿倍野支部旬会(大阪市)は本社三十四年度の最優者としてのカップを受賞された不二田一三夫氏のため、二月十七日に金塚会館で祝賀句会を開催された。▼広島川柳会第二例会は二月十五日午後六時から広島駅会議室で開催。▼川維松江支部旬会は二月十一日夜、なにわ旅館で開催。▼川維下関支部旬会は二月十四日下関駅会議室で開催。▼川維岡山支部旬会は二月二十日午後二時から浜田久米雄居で開催。▼川維米子支部旬会は二月七日午後

一時から西伯町役場会議室で開催。▼川柳並木会(笠岡市)は三月十三日(日)創立五周年記念句会を開催。▼川維玉造支部(大阪市)七周年記念句会は三月十日(木)午後六時から葎乃女史を迎えて市電玉造南百米大阪信用金庫で開催。▼かがみ川柳社(岡山県)松尾笑童追悼句会は三月六日(日)午後一時から鏡野町故実宅宅で開催。▼川維淀川支部旬会(大阪市)では二月二日に武部杏林氏を送る会を開催された。

消息

田久米雄氏(岡山市)は国鉄岡山駐在運輸長付に転任された。▼金子吞風氏(上田市)は目下川柳に忙しくして居られるとのこと、それに上田市役所川柳会が生まれ、助役以下四〇名の会員中には相当ベテランも居るので張合いがある。▼速水真珠洞氏(福岡市)は博多を語る会で文化センターを早くつくってほしい等の建設的な意見を述べられたが一月二十二日付の西日本新聞に紙上録音された。▼越智一木氏(今治市)は近畿方面の旅行の途次、二月二十二日本社を訪問、疲労で臥床されていた路郎主幹と歓談された。▼直原七面山氏(岡山県)は一月十六日岡山地方貯金局の川柳ポスト社の新春旬会に出席、「判る川柳と判ら

ぬ川柳について」と題して柳話をされた。又、二月七日岡山県北房町中津井川柳会に出席、「川柳と人生」「川柳の手ほどき」等につき、講演と実地指導を行われた。▼高田抱逸氏(大牟田市)は土建業を経営される一方、福岡地方、家庭両裁判所の調停委員などを勤められているが最近の大牟田地方のストにアキアキしておられると。「鉢巻の跡を残して年賀に来」▼鳥井川島氏(愛媛県)は一月中旬胃潰瘍の再発と神経痛のため臥床ぶり返した寒さに閉口して居られると。▼横紫光氏(愛媛県)は二月十三日西条市役所階上ホールでのNHK川柳腕くらべ公開録音に出演、生前同放送の指南役で出演されていた前田伍健氏の冥福を

折られた。▼杉本一鶴氏(貝塚市)は二月二十二日手術後の経過よく、南二号の術后病棟の方へ転出され、気分も落着いて作句に精進出来るとの寄信があった。▼蛭子万寿さん(愛媛県)は水郷川柳社(大洲市)の今川棟影氏を内子町で見かけられ駅まで一緒に話された。▼菊沢小松園氏(大阪市)夫妻は二月一日結婚記念に熱海・東京に遊ばれ、「大阪の声を通れて湯にひたり」の句信を寄せられた。▼辻川喜仙氏(大阪市)は目の不自由と体の不調で、暖くなるのを首を長くして待って居られると。「老いぬれど慾気未だに去り難し」

句集

▼堀風船堂氏(大阪市)の句と随筆集「しのびぐさ」が三十四年十一月一日堀昭商店から発行された。文字通り亡き奥さんに捧げられた句集。非売品。

慶弔

▼高橋操子さん(岸和田市)の令嬢芳子さんは二月一日岸和田菅原神社で華燭の典を挙げられた。お祝い申し上げます。▼橋本幸男氏(大阪市)は二月二十二日男子を儲けられた。お慶び申上げる。▼真崎浪速子氏(岸和田市)の令妹美智子さんは一月十日泉大津市で不慮の死を遂げられた。年二十

八。謹悼。▼戸田古方氏(豊中市)の岳父樋田健氏は二月六日午前八時老衰のため死去。年八十八。謹悼。▼今井浪六氏(西宮市)は谷向病院で療養中自然気胸を起し、再三手術を受けられたが、一月十九日死去された。謹悼。▼前田伍健氏(松山市)は二月五日早朝、脳溢血で倒れ真砂町二一の自宅で療養中のところ十一日午後十一時四十八分逝去された。享年六七才、本名久太郎、香川県坂出市出身。氏は四十余年間柳界に活躍され地方文化のため碎心されたことは人の知る通りである。葬儀は十三日午後二時から新玉町の万徳寺で行われた。法名は伍健院釈晃照居士。謹悼。

改号

▼内海敬太氏(奈良市)は阿起男と改号された。

転居・復姓

▼岡部三十郎氏(大阪市)はこの度平田姓に復姓、東淀川区東三国町三ノ四三に転居。▼川端鬼醉氏(大阪市)は大阪市生吉区粉浜東ノ町五丁目九〇番地に転居された。(薫)

不朽洞

会から

★常任理事会——二月十三日(土)午後七時から三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。

一、川柳まつり実行委員選挙の件につき審議九時半散会した。出席者路郎・古方・好郎・榮・竹荘・薫風子・いわの諸氏。臨時常任理事会——二月二十七日(土)午後七時から三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。

飛・燕・往・来

☆富田狸通氏(松山市)より

大いなる足跡残る忘れ霜
本日御ハガキ難有拜見し
た。皆縁からわがことのように御
悔みの御あいさつを頂く度に又立
かされます。

ほんとうに私としては何も彼も
の相談相手であり、つかえ棒だ
ったのでお先き真つ暗らで寂しい
んです。

聞いて置きたいことがたくさん
あったのに。いろいろと病状経
過、葬送の有様は松山の柳界弟子
連中から報告があったことと思

ますが、一週間の意識不明で最後
は伍健老らしい大往生でした。
奥様のお話では「麻生さんの御
病気のことを気にしている時、雀
郎さんの訃報で、それとなく無常
を感じていた。」そうです。尊台
も盟友を失われ御心中御察し致し
ますが、どうぞ御自愛専一に祈り
ます。尚、尊台の御発病のことも
今度、伍健さんの病気に付いて知
りました次第で失礼してしまし
た。地上の伍健さんは失われまし
たが、おもかげの伍健さんは今後
共松山に永久に生き続けわけです
から、砥部焼揮毫のことも是非御
実行下さいませ。お待ちしていま
す。

尚、明晩は伍健院を偲ぶテレビ
放送に出演して又泣かされること
になっていきます。
先ずは右略儀御礼の御返事申上
げます。
呉々も御
自愛を祈り
ます。
(二月十
七日)

「旗雲」が昭和三十四年十二月三十日青玄俳句会から発刊された。青玄の創始者日野草城は「俳句は諸人旦暮の詩である」と、後継者伊丹三樹彦は「批判的リアリズムに依る生活俳句の実践」を称え、青玄の在り方を示したが、「旗雲」はそうした両者の橋懸に相当するものである。

正誤

▼前号四十頁四段五行目三四郎を珊枝郎に、三六頁三段二十行目圭水を和三郎に、二五頁二段十一行目一鶏を一鶴に、三頁目次中蔭風子を薫風子にそれぞれ訂正。▼前号三九頁三段五行目2月17日とあるは27日、三八頁五段十四行目十二月とあるは十一月の誤りにつき訂正。▼前号四七頁の広告題字カット新川柳講座とあるは新川柳鑑賞の誤りにつき訂正。

新刊紹介

下町のよい
スタート
着心地

O.S.K.の
レディマード

株式会社 大坂商店
大阪府東区豊原一丁目三番地
電話(94) 1745 5563番

いのちある句を創れ



▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社二月句会(大阪市)

2月7日 午後6時

会場——大阪観光ホテル

例年なら二月は耐寒句会となるのだが
陽春のような暖冬の日もあるので、うか
つに耐寒なんて書けないのが近ごろの冬
である。

席題「時計」は武部香林、若菜ご夫妻
が婦葬される記念の選となり入選発表は
三月八日文楽座の会場でされることにな
った。句評予定の春薬医博が欠席された
ので路郎主幹が代って、川柳を「諷詩」
とする青竜刀氏の改称運動へ、その意
気壯なるも、問題はそう簡単にいくまい
と、五十何年間川柳のために闘ってこら
れた苦節の春秋を懐古された。

梶川蘇堂氏がお珍らしく出席されるな
どにぎやかな会で柳趣とみにあがる。

不朽洞買の「或人」は老練西いわを氏
の佳句に輝き、前月に引きつづき古豪組
が制することになった。新人諸氏よ、い
ざ起たんかな、奮起一番、古豪を追わん
かな。9時30分閉会。

(F)

出席者—路郎・いさむ・庸佑・一三夫

- ・圭井堂・与呂志・満潮・生々庵・一栄
- ・清子・裕邦・悦子・正一・東天紅・木
- 堂・柳志・潮花・堰子・紫香・徹也・泰
- ・舟遊・静馬・三舟・豆秋・十悟・井平
- ・香林・若菜・全信・保美・多久志・和
- 楽・す・む・清人・柳宏子・狂二・三司
- ・薫風子・千尋・奈良子・惣明・栗・い
- わを・旅風・阿茶・吸江・善風・ともゆ
- き・満秋・六童子・梅志・花村・文秋・
- 蘇堂・佳以子・酔舛・恒明・白水・宏子
- ・霞乃

兼題「成人」 麻生路郎選

- 成人になった途端に肩が凝り 繁太郎
- 成人になったら母のうら若く 敬太
- 成人にはまだまだながら母代り 八九寸
- おい飲めと成人の日の父の声 香林
- まかしたら成人おどろく程うさ 夢路
- 酒たばこ十代よさようなら 六童子
- 酒たばこのんで成人したつもり 尚史
- 成人の日ポマードが良く匂い みつを
- 成人へクラスメイトの変わりよう 雪峰
- 由緒ある膳で成人祝われる とん智
- 成人になつてうかつな言えず 水堂
- 成人としての意見をもとめられ 夢虹
- 成人式知能指数にかかわらず 栗
- 成人の日から朝寝を叱られる 三司
- 引延ばしたいほど成人待ち遠し 井平
- 豆スタオとおと成つて人気落ち 一三夫
- 成人をおだてて一票とるつもり 豆秋
- 成人をしても親の目に子供 庸佑
- 亡妻の影成人の娘に求め 左久良

子沢山成人の子もほつとかれ 良子

- 成人の日ほんとの父を教えられ 多久志
- 成人を父が祝うて父が酔い 帆舟
- 成人の息子初荷の宰相や 珊枝郎
- 成人へもう嫁入りが気にかかり す・む
- 政治家の眼に成人が票に見え 守信
- 水仙を思わすように成人し 一舟
- 成人の日もお母ちゃんお母ちゃん 阿茶
- 成人式赤ちゃんだったのもまじり 狂二
- 成人になって刑務所送りなり 静馬
- 議員等は成人式を見逃がさず 増治郎
- 肉体の方はお先に成人し 七面山
- 成人の子へ徴兵の過去おもう 紅月
- 今日からは大人になった口答え 水堂
- 成人になったが月給すえ置かれ 半歩
- 成人やでえとヒエを出して見せ 博也
- 成人迄がんばるつもりアルバイト 尚徳
- 成人の日にこりない眼の嬉し 小石
- 成人の子にも甘えて欲しい 母花宵
- 息子今日嘘の世界へ仲間入り 圭井堂
- 成人の日だ胸を張れ靴も鳴る 与呂志
- 成人のやたらに腕っ節が鳴り 花乃子
- 成人へ父も遠慮をして話し 鶴汀
- 成人へ浅く水かく手も訓え 十悟
- 成人は下宿したいと言ひ出した いわを

兼題「空 氣」 須崎豆秋選

- 片肺で一人前に空気を吸い 東天紅
- ガイド嬢空気のような声を出し 満潮
- この会社儲かりそうもない空気 多久志
- 空気が澄ええもん食うて瘦せてはり 静馬
- 台風はいわば空気のヒステリー 清人
- アメリカの空気も一寸吸いと行き 満潮

付いといで空気を交えて飲むさかい 十悟

- ただならぬ空気へ猫も膝へ来ず 一三夫
- 息づまる空気へほつと茶が入り す・む
- 断食道場空気はうまいものと知り 香林
- 入るなり老妓は空気察して い阿茶
- 出戻りは冷めた空気意識して 白水
- 険悪な空気へ気軽のお茶を出し 山椒坊
- 草に寝て空気は甘いものと知り 旅風
- 不渡りをくつて空気の抜けた顔 文秋
- 和やかな空気蜜柑配られる 栗
- 空気だけ吸うておれぬと妻の愚痴 吸江
- 一寸出獄て娑婆の空気を吸うたり 圭井堂
- 陽炎のもえる空気を吸いに試歩 栗
- 娘十六我が家の空気気にいらす 若菜
- 税金のいらぬは空気だけとなり 酔舛
- 屋上の空気生駒は晴れわたり す・む
- 試歩の庭空気がうまい深呼吸 柳志
- ピッケルへ山の空気は甘く澄む 潮花
- 肩のこる話へ空気入れかえる 一栄
- 遅刻してその場の空気身につかず 栗
- 新婚が空気をヒンに染めて去に 夢虹
- 柿の木の下で空気が甘い空 梅志
- 信州の空気がうまい二人旅 梅志
- 御馳走は空気だけよと開け放ち 香林
- 淋しさに空気まくらをふくらませ 夢虹
- 胃ぶくろの中で空気の音がする 梅志
- 大阪の空気が黒い鼻の穴 豆秋

兼題「新婚」 西いわを選

- 新婚の何を聞いても怒らない 紫香
- 新婚の夫婦で何もかも喋り いさむ
- 宿帳へまだ恥しい名をならべ 潮花
- 新婚が人気さらつてクラス会 す・む

新婚は笑うてすます味でよし 惣明
 新婚の夢が一つ消え二つ消え 庸佑
 新婚の匂い仲人かいで去に 泰
 新婚の妻に旧姓で来る 賀状 いさむ
 もう暗いとこは歩かぬ新夫婦 旅風
 新婚のあなたは言えずネーとだけ 六童子
 これからは二人でつづける日記帳 三司
 新婚へもう悪友が誘いに来 宏子
 ネエ貴方貴方と一日中呼ばれ 多久志
 新婚の何かまぶしい宿の朝 井平
 新婚は公認という 帰りよう 栞
 新婚列車まださん付けに気が付かず 徹也
 新婚は互に誓うことばかり 吸江
 新婚に独り暮しをいたわられ 与呂志
 新婚のうちは赤字も笑ろて済み 文秋
 キッスするとこを新婚見付られ 文秋
 新婚の話題 未来が美しい 六童子
 インタービューして新婚を売る雑誌 旅風
 新婚は小さな秘密もききたがり 一三夫
 新婚を抱いて山の湯雪になり 潮花
 新婚の二人はバラを見あきない 夢虹

兼題「無駄」 後藤梅志選

ハイヤーでとぼして無駄をうめあせ 潮花
 もつたにないと思う心に見える無駄 文秋
 ムダ骨がいつか上司の目にとまり 一三夫
 年寄りの目にこれも無駄あれも無駄 庸佑
 無駄口も明かるくはずむ昇給日 正一
 無駄承知ろををまことに聞かも歳 花宵
 煮え切らぬ返事無駄足また踏ませ 醉舛
 パセリまで無駄なく食べて律義なり 保美
 一生のながさへ無駄もあつてよし 香林
 無駄のないくらしで息がつまりそう 阿茶
 無駄な事するなと言うて貰つとき 醉舛
 何もかも無駄やと思うノイローゼ 悦子
 窓口の無駄をのそいたシクラメン 香林
 簡単に無駄のはぶける若さなり 千尋
 足まめの割に無駄足ばかりふみ 紫香
 親しさは台所へ来て無駄を言い 紫香
 ムダな釘なしアパートの台所 梅志

席題「勧誘」 梶川蘇堂選

お誘いを受けるスペースない家計 徹也
 横綱が惚れて勧めに来た身体 清人
 勧誘をしないと本人やって来す すゝむ
 勧誘を仮病で避けてデートする 圭井堂
 勧誘高男しり目に未亡人 一三夫
 勧誘はさてこれからの声になり 満潮
 勧誘の精根に負け印を捺し 旅風
 冷えた茶をうまそうに飲む勧誘 香林
 勧誘へこの社長はいつも留守 豆秋
 七転八起勧誘板につき 泰
 誘われればカモになる気で友と会い 裕邦
 勧誘が居直りに似た口もきき 潮花
 あつさり勧誘にのる飲む話 裕邦
 勧誘にのつてよかつた穴をあて 醉舛

席題「けちんぼ」 佐野白水選

条件もけちんぼらしい遺言状 堰子
 けちんぼの意志の強さは恋も捨て 一三夫
 けちんぼが又週刊誌借りて去に 花村
 けちんぼのくせに世話だけするという 栞
 けちんぼへネオンもつたいたくとも 潮花
 羊羹に敵がはえたにくれもせず 多久志
 けちんぼがくれたお菓子を嗅いでみる 阿茶
 けちんぼへ奉賀帳チョッピリ空けておき 東天紅
 けちんぼと言われ養子の話が出 与呂志
 けちんぼの案外大きな家に住み 紫香
 けちんぼのもつたにない癖になり 文秋
 割勘と聞いてけちんぼづいてこそ 庸佑
 余ッ程のけちんぼらしい靴の底 六童子
 けちんぼは親兄弟を寄せつけず 蒔風
 一つぶくしてけちんぼを見破られ 和栞

けちんぼのどこか見どころある男 いさむ
 けちんぼにそのけちんぼををがめられ 圭井堂
 腐る程ためて大根の葉も捨てず 文秋
 先代にまけぬ養子のけちんぼ 三司
 けちんぼの父を許せる年になり 梅志
 けちんぼの真似が出来ないのが淋し 千尋
 幽霊屋敷のようなけちんぼの旧家 豆秋
 けちんぼが養銀ぬきで拜んどき 静馬
 見本だけ食ってけちんぼ買わず去に いさむ
 けちんぼがきれいなことを言うてはる 泰
 けちんぼがマツチの燃えかす残しとき 静馬
 けちんぼの異名十年家を買い 全信
 けちんぼでもけちんぼが随せせず 満秋
 けちんぼのへそくり狙うけちんぼ 与呂志
 けちんぼのくせに他人がけちんぼに見え 多久志
 けちんぼの家主に古い金屏風 蘇堂
 けちんぼの葬式派手に養子だし 花村
 けちんぼに茶漬けの味を教えられ 保美
 けちんぼの余命を知つたあわてよう すゝむ

(庸佑清記)

色紙短冊
 書画用品
 大坂戎屋しんぶ
 丹精堂
 電中セ二七二二

(新春句会紅白戦追記)

席題「姉女房」 清水白柳選

姉女房ちと氣を使う 薄化粧 生々庵
 姉女房不精者には出来すぎて 吉備郎
 書きますわなどとおどかす姉女房 三司
 姉女房もろて早よから世帯じみ 一三夫
 ほころびに氣がつく方が姉女房 梅志
 封建性教えてくれる 姉女房 徹也
 姉女房母もやっぱり 姉女房 客遊子
 加減見に貰えりやはほし姉女房 正一
 姉女房氣取りにあたりがはらほらし
 姉女房生命保険氣に入らず 豆秋
 お前には姉女房がええと仲人口 庸佑
 姉女房持たせたいようなお人好し 柳宏子
 姉女房でいて箸のこけたも報告し 良子
 ハイハイと姉女房に銅背され 万楽
 姉女房と見られたくない身だしなみ 客遊子
 妻となりママをも兼ねる姉女房 和衆
 姉女房へ一寸浮氣で抵抗し 鎮海
 長生きをしてネと姉女房すなお 水客
 姉女房噂をよそによく動き 昌男
 姉女房らしく見立てがやかましい 博也
 夫も子も頼り切ってる姉女房 七面山
 姉女房内攻性の夫になり 旅風
 年上の妻で 近所を羨ませ 木堂
 年きかれ語尾をにこした姉女房 尚史
 姉女房もらいちがえて来た感じ 梅志
 姉女房他人は養子かと思ひ 文秋
 姉女房でいて外出し勝ちなり 良子
 案外なところで負ける姉女房 古方
 姉女房まっす風呂へ行けと言う 亜鈍
 姉女房つき合いなどはまかしとき 全信

姉女房でんねと笑うて紹介し 庸佑
 鍵しめてから姉女房に甘えられ 保美

川維 ハワイ支部句会 (ハワイ)

筑山快夢起報

顏色で今日の金策無駄と知り 快夢起
 顏色を読んで女將は酌いでくれ 魔花麗
 顏色でしどもどろの返事をし 風草
 顏色を読むほど孫に智慧が付き 浅太
 顏色の変化は恋の晴雨計 柳葉
 顏色がハワイ焼けて金が出来 拜山
 御機嫌を顏色で読む女秘書 平八郎
 忍ぶれど色に出でにけり二日酔 芥平
 顏色へ腹立ち見せぬ良い嫁御 泉木
 反かれて居る顏色に前後策 笑有
 意地つ張り顏色変えず腹で泣き 曉舟
 道連れの不良顏色ではよめず 罔防
 悪童が母の顏色ぬすみ見る 緑星
 番生と言わねど顔の色でよめ 青風
 顏色を見てから今夜帰ります 銀木
 嫁姑口ほど 顏色物を言い 内海
 顏色の冴えぬ主人に氣を遣い エス子
 神さまへ色の黒さの恨み言い 旋風
 苦勞性顏色読んで 秘策ねり 吟声
 ほっとした顏色怪我がきき 須磨子
 ごまかしも効かず顏色読まれては 紅溪
 手術前の我にかえった顔の色 惠津子
 顏色で晩酌までが加減され 紅茶

川維 淀川支部句会 (大阪市)

木村水堂報

俺に似て凡人でよしランドセル 六童子
 儲かります話で凡人ひっかかり 全信

凡人の夫に送る感謝の眼 東洋男
 炬燵にも飽いて凡人春を待ち 若菜
 あいさつがすめば晴れ着のおせじ云い 尚徳
 晴れ着きて余分に親戚廻つて来 三十郎
 晴れ着までそろえて病んでる不倅せ 一鶴
 田を売った晴れ着を娘着て嫁ぎ 幽谷
 流行に妻の晴れ着はずれており 利明
 無理をした晴れ着と知らぬ七五三 木堂
 千鳥足音せぬように表開け 句念坊
 お隣りの喧嘩茶碗の破れる音 陽子
 もろもろの音を抑えて母の鐘 和衆
 爆音へ鶏の生理も狂わされ さぎす
 妻といさかえば子も音を寝る 清生
 音たてて師走生活が崩れそう 花村
 老の身の都会の音を逃げたがり 香林

川維 阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

初恋は口笛を吹くベレー帽 奈良子
 道端のはこり似顔をかくベレー帽 生薑
 提げるのに持つところのあるベレー帽 十梧
 チヨンマの中へチョコチョコベレー帽 堰子
 大物の貫録でかっ居る短軀 すむ
 雲つかむような顔して大もの来 晃
 大物と目されどこか抜けて見え 一三夫
 大ものくせに演説ぎらいなり 白柳
 問題のシーンスチールだけ撮し 鎮海
 ラブシーンチュウインガム息をのみ 薫風子
 よいシーンよいとて切り予告編 文秋
 すべり出し本目の馬がけつますき 喜仙
 すべり出し足は流行って店を閉め 好郎
 スト中止初発静かにすべり出し 庸佑
 すべり出しだけは労資も仲よくし 竹莊

我流なら少しは弾ける母の三味 清人
 三味線が我流の唄へどぎまぎし 豆秋
 初孫へババの陽気なひとり言 繁雄

川維 にしなり支部句会 (大阪市)

後藤梅志選

夜まわりでどうきゅう生も火の用心 慎太郎
 背をまるめながら夜廻り辻に消え 晃
 夜廻りも足をゆるめたたい月夜 柳志
 金づるをつかえを言いたい事を言う 舟遊
 百人一首得意をつかむ天の原 北人
 風をつかんで帰る拳をポケットに 葉平
 執達史息子の名前書いて去に 白柳
 執達史或る日無情と思えども 六童子
 手際よい処置の憎さも執達史 薫風子
 わたくしも食わねばならぬ執達史 塊人
 紙屑の中でクリスマス夜の踊り 蘭
 クリスマス独身寮はからになり 菁風
 支那を出る迄は母何やかと 生薑
 帰郷して母の味する胡瓜もみ 保美
 終戦後未だにモンペの続く母 清人
 老いし母ことりともせず達者なり 泰
 勿体なや母の便りをうんざりし すむ
 新聞のすみまで読んで母老いず 利男
 母若しリンゴの皮の長くむけ 千尋
 風邪ひいたまままで師走の母せむし 葉光
 写される母に合せて背をかかみ 帆舟
 母からの封書番地がまた違い 満潮
 いっち好き母の鼻先指でつき 旅風
 火鉢のふち掴み一徹者になる 梅志

川維 玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

紙屑を渡る手に生活支えたる 柳宏子
 早熟な娘にもう一間欲しくなり 文秋
 苦笑いテレビにませたこと覚え 白柳
 母真似て人形へませた言葉つき 井平
 縁の下内緒で飲んだ空の瓶 透水
 空瓶を捨てて悔なし 退院日 清
 はじめてでないのに何故か他人のよう 吉備郎
 母になる胎動初めて知った朝 一栄
 仕事始め芯から酔がさめぬまま 清子

川雑 弓削支部句会 (岡山県)

直原七面山選
 遊境が離縁話をあふりたて 句念坊
 遊境に耐えて育った子の真面目 たつよ
 遊境に妻に教わる 手内職 幸堂
 遊境に愚痴も言わない子が頼り 岡甫
 子宝があり遊境を悲しまず 山茶花
 遊境に北風冷たいものと知り 喜楽
 澄み切った空へ負けない娘の瞳 只世
 盲人と後で判った色眼鏡 静江
 弁当を持たぬ子独り花を摘み ちとせ
 豊作で瘦せたい娘がまた 太り 柳子
 豊作の顔が集まる 特売場 義風
 豊作についで乗せられた口車 登仙坊
 豊作に嫁入り道具 数を増し 睦美
 豊作の案山子やっぱ古着を着 珠美
 豊作を妻の手紙で知る ベッド 梅浦
 豊作へまだ百性の欲があり 賤女
 豊作のしようこテレビに洗濯機 七面山

川雑 大聖寺支部句会 (加賀市)

野村味平選

引越しへ大事な鈍子のふちが欠け 美代

一本の鈍子へ陽気な父の顔 久雄
 お鈍子を持つて骨董屋の目で眺め 金仏
 送り膳鈍子一本義理につき 光郎
 お鈍子と一しよにころがる酔いっふれ 恒雄
 名もなまず老いのほろ酔い詫しがり 一路
 給料日みやげを忘れぬほどに酔い 魯木
 め飾り老夫婦だけのお元日 醉羊
 つつましく女住いのめ飾り 味平

川雑 西宮支部句会 (西宮市)

菱田満秋報

家の中見直し催促あきらめる 高史
 よお燃えてまんと他人ふところ手 泰
 特二から呼ばれ赤帽二人来る 三司
 赤帽を無視して荷物持って降り 半歩
 おでんの灯つひ誘われる場所 弦月
 おでん屋に馬鹿にならない借りが 出来 薫風子
 催促に向いて利子を値切られる 満秋
 めいめいの味出しあつて 舟遊
 赤帽の手から手迎え取戻し 一十
 催促の出来ぬ揮毫を頼んで来 静馬
 おでん屋へ来てから幹事酔うて 一傘
 三等の方へ赤帽やっ来て来ず すむ
 そこらまで来た序でだと催促し 多久志

川雑 浜寺支部句会 (堺市)

川村好郎報

結末も多数決とは淋しすぎ 貴山
 結末も見通して 懐手 薫風子
 結末も聞かず女房ふくれだし 狂二
 受話器から自宅のボチの声もする 徹也
 物堅き名刺に自宅刷ってなし 梅志
 一城の主と自宅の平社員 雄声

領収書かいて女将になって去に 古方
 我儘のスペースがない子 沢山 保美
 柔かい腫が我儘をそとさせ 裕邦
 まだ恋を知らぬせんざい笑い 昌男
 結末はどうであらうと逢いにゆき 文蝶
 領収書きれいなペンで書いてくれ 芳子
 どないでも書きまっせと領収書 生々庵
 領収書これは家内にみせる方 小石
 全快に近い我儘うれしがり 好郎
 半分であんまが帰るほど 気儘 圭井堂
 最後の我儘ですと飛び降りる 帆舟
 我儘がすぎて親子も言わず 敷本
 二重丸こは自宅という 略 武助
 自宅まで送る約束をして吞まし 南宗

川雑 鳥取支部句会 (鳥取市)

河村日満報

ぬすまれて三面記事のすみにのり 辰春
 盗難が挙つてひみつ品の品がばれ 天保銭
 釣銭を受取り買物忘れて来 天邪鬼
 四者会談他党のほろへ眼が光り 愚球
 思案して思案して女一つ 買 い 一机
 子を寝かしそれから妻はあみあげる 秀和
 出しているのが子弁当を又忘れ 星影
 思案した挙句最初の案にする 多可志
 仕上げ前一寸着まて見る 児の嗜着 芳道
 先生の鉢が入って仕上げられ 三歩
 福引が当り買もの忘れて来 若人
 もの忘れして歳のこと又言われ 耕民
 思案また妻の意見にゆすがられ 湖山
 光頭会色気は未だおとろえ 八歩
 寝入りばなでしかも言うて届ける 日満

川雑 松江支部句会 (松江市)

梶谷冬生報

繁昌の隅っこにある 赤電話 天痴人
 二男郎一寸のぞいた自家用車 祥月
 故里へ錦自家用車で帰る 妖人
 清熱は家名なんかにとらわれず 孤呂二
 子のいない淋しさを知るまじ向い 快哉
 丸窓の方から旅の朝があけ 章道
 清熱はかくてさびしい年となり 冬生
 丸窓のついた旧家が売りに出る ふる見

川雑 米子支部句会 (米子市)

小西雄々選

新春のひかり四畳半に満つ 鶴丸
 金のひかり輪の違ひも何のその 車桑芥
 天婦羅の指輪もひかる方を買ひ 吾柳
 ひかるので拾いかけたら瓶の蓋 奎

品質優良
先ペンカチ
 TACHIRAWA PEN
 タチカワペン
 タチカワゼム
 タチカワ画紙
 大坂市東区常盤町一丁目十一番地
 立川ペン先株式会社



道頓堀だから小雨もリズムミカル 生々庵
溜め息は背中合せの灯消し 阿茶
溜め息を母へおどかす手に使い 生々庵
溜め息をお乳のむ子が下から見 阿茶

大阪誠信病院川柳会 (大阪市)

橋本幸男報

乳くさい肌母性愛かきたてる 草右
肌見せた丈でも女生きてゆけ 春雄
肌よりも顔がきになる二十代 正徳
床柱やんわり立ってかくし芸 没食子
あられもない逆立をした芸者 風船堂
かくし芸酒がたらんとひやかされ 露児
かくし芸調子はすれの声もよし 宏子
忙中の閑老母の肩を揉む才女 夏生
今日迄は才女で通す娘あり 康彦
才女といわれ女らしさを忘れかけ ハナ子
マスコミのこわさ知ってる喋りよう 春巢
マスコミの知識だけがよく喋り 方正
ポリニウムを見せモードの魅力的 けい女
かくし芸十八番を出せとつり出され 比呂志
やわ肌も知らず甲斐性なしにされ 愛論
マスコミの世界恋するひまもおし 竹莊
立呑みへいま職安で貰うた金 幸男
立ち飲みの暖簾が招く午後六時 よしを

南海電鐵川柳会 (大阪市)

辻 圭水報

只乗りがバレたで酔った振りをする 和郎
只乗りの分バチンコにしてやられ 圭水
只乗りと間違えられた期限切れ 宏子
ただ乗りを土産話にするも旅 好郎
無賃乗車役得と云う職につき 雄声

只乗りの味放浪の癖がつき 狂二
あの顔が只乗りしたとは思えぬほど みなつき
改札をおんぶとだっこ子沢山 句念坊
無賃乗車外の景色が目に入らず 貴山
家出して薩摩の守で上京し 路郎
只乗りをしたのをチビラ手柄にし 同
顔で乗る小ボブズボンに下駄を履き 同

帝化川柳会 (大阪市)

谷沢好祐報

夜廻りの音も冷たい十二月 孝夫
外泊を妻の涙で反省し 風柳
十二月財布の紐がまたゆるみ 義雄
お隣りは新婚らしい言葉つき 一平
終業のベルへ新婚落ちつかず 辰始
漬物の石を新婚借りに行き 好祐
ポーナスをあてに下見の十二月 柳影
十二月と言うのに亭主又休み 春潮
新婚を発たせ折詰重くなり 九柴
坐り込みも尻に火のつく十二月 蒼芒
新婚の朝を明治は気を使い 雅堂
十二月病人奥ではっとかれ 京一樓

明和川柳研究会 (西宮市)

樋口舟遊報

肩書の五つなんにもしない人 泰
生き写し母の形身へ身をつつみ 弦月
手真似する猿のまぬけな顔おかし 舟遊
肩書を恋のてだてにし給うな 薫風子
大袈裟な手真似でふつと呑み込ませ 三舟
エキストラお城の雲を見てのだけ 満潮
淡々として才女にある思慮 寿栄
提げ鞆会うな手真似は儲からず 牧人

聞かずとも父さん知れる子を連れて 半歩
プリンスをついふらからにした才女 梅志
秋空へ幾歳月の天守閣 幸
生き写しと言われ顔しらぬ父を恋い す、む
極道の神妙な日の気味悪るさ 山友
極道の案外女親 思い 参無子
弾の跡古城は昔のむしたまま 六童子
極道のせいだつしやろと手きびしい 敬太
頭ひくい才女が皆に親しまれ 球絵
極道の昔ばなしとなった酔い 旅風

川柳婦人友の会 (大阪市)

藤村梨花報

女もうすしを聞いている酒宴 春栄
もうおすし食べてもよいか医者にさき 問甫
にぎりずし舌ぐりぐりと海老おどり 一栄
大阪弁で通す社長の底力 若菜
おますおますと快よう貸してくれ 阿茶
大阪弁活字になると読みづらく カネ女
ロケット機もう夢の世は通り過ぎ 智恵
フランスへ飛ぶ夢も持つトーションズ 奈良子
御手流主人はバッグ持たされる 小石
バッグ今その人柄をキャッチせり しの女
遠慮する子へ割箸を割ってやり 花奈女
割箸の音で宴会始められ 良子
みくじ引く順番を待つ初詣 花代子
凶と出たみくじ小ちやく丸められ 清子
まだ吉が出えへんねんと引きつづけ 孝江
ドライでもみくじ引く気になる悩み 梨花
呑ん兵衛へ出したおすしは手がつかず 霞乃

富柳会 (富田林市)

阿部柳太報

スタラムを組んで同志の愛を知り 紅月
スタラムへ社長の窓は閉じたまま 柳太
旅のはじ等と男の瞳がにこり 六童子
酒ゆえに今日も愚妻のぐちをきく 克忠
年令若くはげて社長は智恵者なり 増治郎
評判を気にする程の年でなくとも子
評判の割に少ない下駄の数 摩天郎

コクヨ川柳会 (大阪市)

ポーナスも空しく消えて大晦日 ほたる
肩書が邪魔で老後の職がなく 同
ポーナスをせっせと溜めて女ふけ 狂史
おなさけの肩書ついて停年か 同
みそかそばイバラの味をかみしめる 政義
商魂が呼んでるポーナス持つて来い 同
元大佐の肩書で書く大戦史 柳波
肩書に宣業とありチンドン屋 同
大晦日パタ屋も今日は早仕舞 亀心
賞与などこの話とパタヤ行く 同
肩書のないハンサムに女給寄り 傍石
どこに行く夜汽車の中の大晦日 北斗
ポーナスに社長の苦言うわのそら 柳応

大萬
梅里の店
★大万川柳(第百九回)を募る
兼題「養子」 路郎先生選
締切・三月十五日 五句以内
発表・三月廿一日 (店内掲示)
投句先 阿倍野区松崎町三ノ二
大万川柳会宛



★ ペンの散歩 ★

▼二月にオーバー(正しくはオバアと書くのだそうだが)が、じやまになるほどの暖い日もあって、近年、チリ紙を売っている店がサッパリとのこと、その理由は寒さの水っぱなが出ないからだそう。庭の肌大くらしいの池の水もぬるむこのごろ、死んだとおもっていたきよ年の目高が草の蔭からチヨロチヨロ動き出し、「おお、生

きていたのか」と思わず祝福をおくったものである。

▼路郎・腹乃両先生も、川柳まつりの前日、五月十四日は宝塚で一泊ときました。両先生を囲んでの一泊、おもうだけでも胸がおどるといふものだ。こんな好機はそうザラにない、とボクをふくめて早や数人の一泊申込みがあった。三食つきで六百円は安いがお申込みは4月15日までとなっている。

みどりの宝塚、夜の温泉街漫步、15日の朝は宝塚撮影所見学、午後から大会と二日つづきの天国だ。川柳まつりも迎えてこととして七年目である。年々盛大になってい

くことは「同慶のきわみである。▼さきに前田雀郎氏、こんどは前田伍健氏とわずかの間に東西の両前田先生をうしなした。かなしいかな。

▼伍健氏を悼む長野文庫氏の原稿が本号のまに合わなかったが、阿部佐保蘭氏が「前田雀郎先生を憶う」を寄せてくださった。

▼前号の句評座談会は好評だった。本号は句評リレーである。一瓢・薫風子・晃三氏の活躍にご期待ください。

▼富士野鞍馬氏がまた次号から麗筆をふるってくださる、古句愛好家の皆さん、お待ち遠さま。

▼路郎先生から「痛快な人でね」と、ときどき東野大八氏のおうわさをきいていたので、一度お会いしたいと思っていたところ、2月12日やっとその念願がかなった。すぐうちつけられるのもやはり筆の世界の人だからでもある。

▼皇太子妃美智子殿下は2月23日午後4時15分、皇居内宮内庁病院でめでたく男子をご出産になった。売らんかなの週刊誌など、男子か女子か、ケンケンゴウゴウは日本約だった。予定日は三月一日だったそうだが、早産ではなく正常産とのことと国民も安心したことである。(一三夫)

日時 5月15日(日) 午後一時

会場 宝塚阪急旅行会館

(阪急宝塚駅下車・宝塚撮影所隣り)
・宝塚市宮ノ下 電話宝塚四二二番

司会 西尾 榮
開会の辞 土井 文 蝶
挨拶 中島生々庵

柳 兼 柳 兼 柳 兼
麻生路郎 選

「温 顔」(三句) 麻生路郎 選

「洋 酒」(三句) 北川春葉 選

「困 体」(三句) 清水白柳 選

「おしゃべり」(三句) 須崎豆秋 選

「素っ破抜き」(三句) 若本多久志 選

「自 信」(三句) 後藤梅志 選

席題 当日 二題発表(各題三句)

★特別課題「学生」発表 麻生路郎 選

呈 賞 ★各題天地人・路郎選天位に不朽洞賞

余 興 有志 諸 家
閉会の辞 川 村 好 郎

会 費 百五十円(参加者全部におみやげ進呈)

懇 親 宴 会費三百五十円(同会場において5時半から7時まで)

★一泊ご希望の方は六百円(三食つき)でお世話いたします。但しお申込みは4月15日までに。

★投句だけの方は郵券三千円同封(メ切4月末日)

大阪市住吉区万代西5ノ25

川 柳 雑 誌 社

電話 6081番

ノイローゼをふっとばす

習慣性や副作用の心配がない 催眠鎮痛剤



30錠 60円 100錠 150円・医家用には粉末 25g〜

日本新薬株式会社

プロバリンはもちろん催眠剤ですが、又二方に於ては大脳皮質性の緩和と鎮痛剤としても大へん広い用途を持っています。例えは……最近話題のトランキライザー的な使用法もその一ツ……イライラ、ジリジリした時にも二、三錠これて気分も落ち着いて夜も又安眠、という訳あまりクヨクヨせず、今晩はプロバリン錠で熟睡なさってください。

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌

3月号発売中

100円(〒8円)

清涼飲料衛生法の矛盾
Xマス・ケーキ
二割増を解剖する
だしの素進出の波紋

アイスクリームと原資材
人口増加と食糧問題
座談会 殺菌灯と食品工業

◇海外情報 ◇特許告知板
(商標ニュース・意匠ニュース欄新設)

【展望台】主食・罐詰・菓子・酒類・香料等

大阪府北区 食品と科学社 振替 特
木幡河内5-5-4 電話345291-4 大阪6702番

麻生路郎著

好評噴々

川柳雑誌

川柳の味い方・五百数十句

(毎日新聞評)

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう五十五年にもなる。

この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心として、その他の柳話や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資せうとしたものである。

大阪府住吉区西代四丁目二五番地

発行所

川柳雑誌社

電話 大阪 六〇八一
郵付口座大阪七五〇五〇

価二五〇円
送料三二円
B6版
二五〇余頁

は湯は師心 品やぐ 手若

ここに座席指定券がある。だから私たちは安心して清潔な快い旅ができる

白 浜 温 泉
デーゼル準急2「きのくに」号
なんば発 毎日 12.30
全席指定制 白浜口まで 620円
7日前から なんば 堺 岸和田
の名駅日本交通公社南海交通社発着
週末準急「くろしお」号
なんば発 土曜ごと 12.55
座席券 7日前から なんば駅で発着
椿 湯川 游 勝 浦
南紀直通新宮行夜行列車
なんば発 毎日 21.55
座席券 7日前から なんば駅で発着

ご行楽のご相談お申込
なんば駅案内所 (63)1151 (64)8686
南海交通社 (64)0103 (34)5038-9

南海電車

何を選んでいただくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのにも心にくい贈物かと存じます

一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

高島屋

なんば 日本橋
大阪 東京 京都

printed in Japan

募 集

課題吟募集

少下 友洲 貴山 選
ニコヨン 吉津 圭井堂 選
女手 津 柳慶 選
白 清水 白柳 選
家 岡西 田夜 選
農 浮 家 白 選
告 家 白 選
近作柳梅 每号募集
川柳塔 (雑誌十句以内) 麻生路郎 選
文 章 (評論・研究・感想其他) (毎月十五日前)

投稿規定

▼ 投稿は各種必ず別紙に認め、生所氏名雅号を明記する事
▼ 「近作柳梅」は一般作家の雑吟を募る。
▼ 「課題吟」は誰でも投稿が出来る。
▼ 「川柳塔」の投稿は不朽副会員に限る。

川柳雑誌 第三十五号

半力年 四四四四円
一力年 八四〇〇円

昭和三十五年二月廿五日印刷
昭和三十五年三月一日発行

大阪府住吉区西代四丁目二五番地
編集長 麻生路郎

発行所 川柳雑誌社

電話 大阪 六〇八一
郵付口座大阪七五〇五〇

昭和廿二年七月一日 第三編郵便物認可
昭和廿五年三月一日発行(毎月一日発行)

編集委員
発行印刷人

養生堂二部 倉敷市

川柳雑誌編集部

〒545-0051 大阪府大阪市東区

電話 大阪局六〇八八 郵政口座 振込 五〇五五〇番

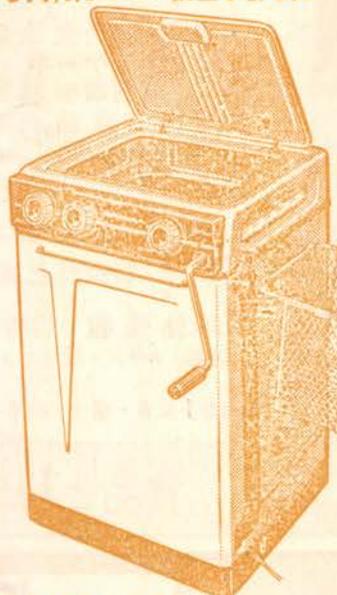
定価七十円(送料別)

大型マジックターン



よじれず・いたまない自動反転うずまき式

ク洗うク技能では最高のマジックターンが 使いよさをふんだんにとり入れた+型が誕生しました



SW-60型
正価 27,900円
月賦正価 29,100円
SW-36型 22,900円
SW-37型 20,000円

洗たく機は



三洋電機株式会社

みんなが着て
みんなに
喜ばれている

倉敷ビロン学生服

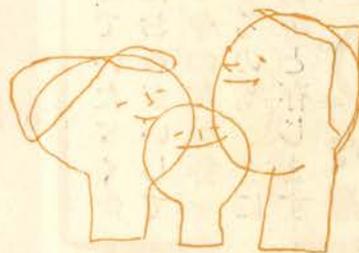
学生服用として特別につくられた丈夫で着心地のよいビロンが使つてあります



文部省・通産省推奨の純国産合成繊維

倉敷レイヨン株式会社

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL @ 551-2

麻生路郎先生著

川柳とは何か

川柳の作り方と味い方

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたものもろが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的であるその川柳がいかんして發生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えてくれるのが本書である

取次所 川柳雑誌社

送価 二五〇円
三三〇円

至文堂

東京都新宿区払方町27 振替東京29507